

斐川町文化財調査報告10

島根県斐川町

# 遺跡分布調査報告書

1992年3月

斐川町教育委員会

島根県斐川町

# 遺跡分布調査報告書

1992年3月

斐川町教育委員会

## 序

本町の南部丘陵地帯は、大量の青銅器の発見で一躍有名になった荒神谷遺跡をはじめ、埋蔵文化財の宝庫であります。反面、近年の企業誘致、道路整備などの大規模事業により、埋蔵文化財が破壊に瀕しているのが現状であります。

このような状況の中で、文化財保護と開発との調整を円滑に進めるために、当町では平成元年度から3年度にかけて、国庫補助を得て町内遺跡分布調査を実施してまいりました。

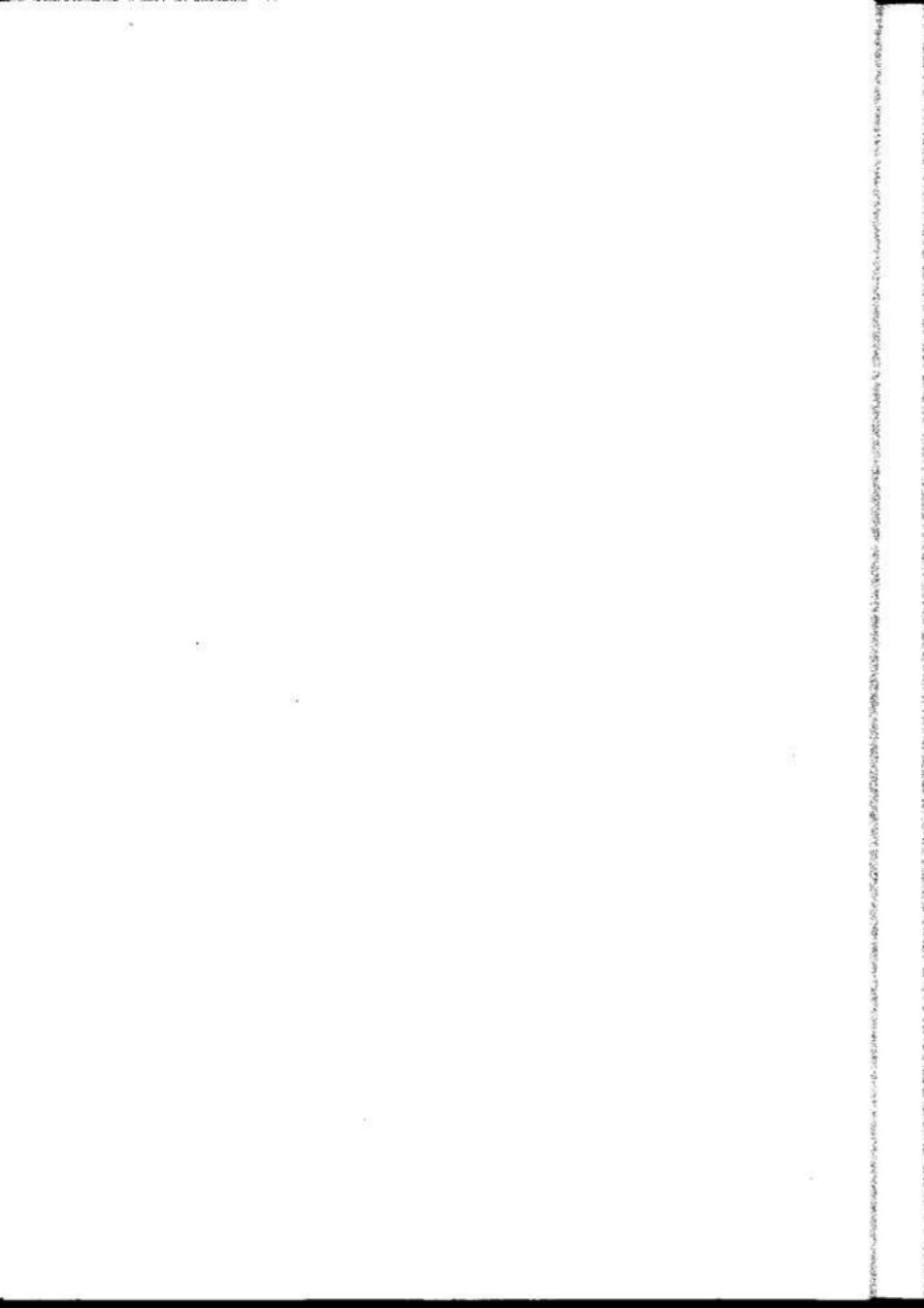
この報告書は3ヶ年にわたる調査成果を納めたもので、今後の遺跡の取り扱いの基礎資料となり、さらに、住民の方々の文化財に対する関心が高まれば幸いに存じます。

最後に、調査に快く協力していただいた地元関係各位、終始ご指導を賜った島根県教育委員会に対し、深甚の謝意を表するものであります。

1992年3月

斐川町教育委員会

教育長 杉 谷 光 昭



## 例　　言

1. 本書は、斐川町教育委員会が平成元年度から平成3年度にかけて、国庫補助事業として実施した町内遺跡分布調査の報告書である。
2. 調査は、分布調査のほか、大倉IV遺跡及び郡家（長者原）推定地の範囲確認調査、さらに小丸子山古墳、外ヶ市古墳、天寺平廐寺の測量を3ヶ年に分けて行った。
3. 調査体制は次のとおりである。

平成元年度

調査指導者　蓮岡法雄（穴道町立穴道中学校教頭）

鳥谷芳雄（島根県教育庁文化課主事）

調査員　穴道年弘（斐川町教育委員会社会教育課主事、担当者）

常松幹夫（　　同　　主事）

調査補助員　岩橋孝典（奈良大学学生）

事務局　有藤　達（斐川町教育委員会社会教育課長）

陰山　昇（　　同　　文化係長）

遺物整理　内田久美子

平成2年度

調査指導者　池田敏雄（斐川町文化財保護審議会委員）

調査員　金築　基（斐川町教育委員会文化課主事）

穴道年弘（　　同　　主事、担当者）

常松幹夫（　　同　　主事）

事務局　富岡俊夫（　　同　　文化課長）

山根信夫（　　同　　文化係長）

遺物整理　内田久美子

平成3年度

調査指導者　山本　清（島根大学名誉教授）

水野正好（奈良大学文学部教授）

上原真人（奈良国立文化財研究所埋蔵文化財センター主任研究官）

藤岡大拙（島根県立女子短期大学教授）

池田敏雄（斐川町文化財保護審議会委員）

川原和人（島根県教育庁文化課文化財管理指導係長）

調査員　金築　基（斐川町教育委員会文化課主事）

宍道年弘（斐川町教育委員会文化課主事、担当者）

北脇三己（同 主事）

常松幹夫（同 主事）

調査補助員 錦田剛志（国学院大学学生）

事務局 富岡俊夫（斐川町教育委員会文化課長）

山根信夫（同 文化係長）

遺物整理 内田久美子、青木由美

4. 山土遺物の鑑定・分析については、下記の方々から多大なご指導、ご教示をいただいた。

赤澤徳明、池田満雄、伊藤瑞章、今岡一三、置田雅昭、片岡詩子、勝部術、中山和之、原俊二、原祐司、藤原久良、松山智之、三浦清（以上50音順）、島根県教育委員会文化課、島根県立八雲立つ風土記の丘（敬称略）

なお、三浦清氏から「斐川町大倉IV遺跡出土のいわゆる碧玉について」、池田敏雄氏から「山雲郡家の所在地考」と題して、玉稿を賜った。

5. 現地での調査にあたっては、土地所有者である原清成、飯塚定夫、福原繁夫、土江国雄、多々納彰一、陰山昭、保科育夫、保科進、多々納幸男の皆さん、地元作業員の方々から多大なる協力を賜った。記して謝意を表したい。

6. 現場での調査・図面整理・遺物実測・執筆は、宍道が担当し、一部金策、北脇、常松の援助を受けた。遺構・遺物の写真撮影は宍道が行い、浄書は内田、青木が行った。

7. 測量については、㈱コスモ建設コンサルタント、㈲松江測地社、写真撮影については、アジキスタジオの協力を得た。

8. 本書中の挿図は、建設省・国土地理院発行の1:50,000今市、斐川町発行の1:5,000斐川町基本図、1:2,500出雲都市計画区域図の部分を縮小し、加筆して使用したものである。

9. 郡家（長者原）推定地で使用した各層名は、日本色研事業株式会社発行の新版「標準土色帖」（1990年版）を参考にしたものである。

10. 本調査によって得られた資料は、斐川町教育委員会で保管している。



天寺平廃寺遠景  
(↓の部分に所在する。南から写す。)

# 目 次

## 序

### 例 言

I.はじめに .....	1
II.調査の概要 .....	5
1. 遺跡分布調査 .....	"
2. 大倉IV遺跡 .....	15
3. 郡家（長者原）推定地 .....	29
4. 小丸子山古墳 .....	41
5. 外ヶ市古墳 .....	43
III.おわりに .....	45
特別寄稿 .....	47

### 挿 図 目 次

第1図 斐川町の位置 .....	1	第25図 第6調査区出土遺物 .....	26
第2図 斐川町遺跡分布図 .....	4	第26図 第6調査区 .....	27
第3図 新発見遺跡分布図 .....	5	第27図 第7調査区 .....	"
第4図 新発見遺跡分布図(1) .....	7	第28図 郡家（長者原）推定地の位置 .....	29
第5図 大倉城跡郭配置図 .....	8	第29図 トレンチ配置図 .....	"
第6図 宇星谷城跡郭配置図 .....	"	第30図 方眼設定図 .....	30
第7図 新発見遺跡分布図(2) .....	10	第31図 第1トレンチ .....	31
第8図 結城跡郭配置図 .....	11	第32図 第2トレンチ .....	32
第9図 新発見遺跡分布図(3) .....	12	第33図 第3（上）、第4（下）トレンチ .....	33
第10図 新発見遺跡分布図(4) .....	13	第34図 第4トレンチ上述 .....	35
第11図 新発見遺跡分布図(5) .....	14	第35図 第1(1)、第2(2)、第3(3)、第4 (4~6)、第6(7~8)ト レンチ出土遺物 .....	"
第12図 大倉IV遺跡の位置 .....	15	第36図 第5トレンチ .....	36
第13図 調査区配置図 .....	"	第37図 第6トレンチ .....	37
第14図 第1調査区 .....	16	第38図 第7トレンチ出土遺物 .....	38
第15図 第1調査区出土遺物 .....	"	第39図 第7トレンチ .....	39
第16図 第2調査区 .....	17	第40図 小丸子山古墳の位置 .....	41
第17図 第3調査区出土遺物 .....	"	第41図 小丸子山古墳墳丘断面図 .....	"
第18図 第3調査区 .....	"	第42図 小丸子山古墳墳丘測量図 .....	42
第19図 第4調査区 .....	19	第43図 外ヶ市古墳の位置 .....	43
第20図 第4調査区出土遺物(1) .....	22	第44図 外ヶ市古墳出土遺物 .....	44
第21図 第4調査区出土遺物(2) .....	23	第45図 外ヶ市古墳玄室測量図 .....	"
第22図 第4調査区出土遺物(3) .....	24		
第23図 第4調査区出土遺物(4) .....	25		
第24図 第5調査区 .....	26		

## 図版目次

図版 1	斐川町航空写真 (昭和61年8月撮影、ワールド 航測コンサルタント作成によ る合成写真)	図版16	大倉IV・第2調査区 同・第3調査区 同・出土遺物
図版 2	欠ノ元1号墳 大倉城跡	図版17	大倉IV・第4調査区遺構検出状況(北から) 同・遺物出土状況(北から) 同・遺構完掘状況(北から)
図版 3	宇屋谷城跡 宇屋谷II遺跡	図版18	大倉IV・第4調査区溝内堆積状況(東壁) 同・(西壁) 同・(南壁)
図版 4	神庭谷III遺跡表採遺物(1) 神庭谷III遺跡表採遺物(2) 尾山瀬II遺跡	図版19	大倉IV・第4調査区遺物出土状況
図版 5	三絡VII遺跡 尾山瀬II遺跡・三絡VII遺跡 表採遺物	図版20	大倉IV・第4調査区出土遺物(1)
図版 6	三絡IX遺跡 三絡IX遺跡表採遺物 奥遺跡	図版21	大倉IV・第4調査区出土遺物(2)
図版 7	三絡X遺跡 三絡X遺跡表採遺物(1) 三絡X遺跡表採遺物(2)	図版22	大倉IV・第4調査区出土遺物(3)
図版 8	三絡XI遺跡 三絡XI遺跡表採遺物 紙面原遺跡	図版23	大倉IV・第4調査区出土遺物(4)
図版 9	紙面原遺跡表採遺物 結木谷III遺跡	図版24	大倉IV・第4調査区出土遺物(5)
図版10	結木谷III遺跡表採遺物 結城跡 和西II遺跡	図版25	大倉IV・第5調査区 同・遺物出土状況
図版11	和西II遺跡表採遺物 小野遺跡 小野遺跡表採遺物	図版26	同・第6調査区 同・第7調査区
図版12	押星古墳群 後谷丘陵古墳群 中出西II遺跡	図版27	大倉IV遺跡調査指導風景 郡家(長者原)推定地遺景(北から)
図版13	中出西II遺跡表採遺物 海の平遺跡	図版28	郡家・第1トレンチ 同・第2トレンチ 郡家・第1(左)、第2(右) トレンチ出土遺物
図版14	海の平遺跡表採遺物 上阿宮I遺跡	図版29	同・第3トレンチ遺物出土状況 同・出土遺物
図版15	上阿宮I遺跡表採遺物 上阿宮II遺跡	図版30	郡家・第4トレンチ 同・土塁検出状況 同・出土遺物
	上阿宮II遺跡表採遺物	図版31	郡家・第5トレンチ 同・第6トレンチ遺物出土状況 同・出土遺物
	大倉IV遺跡全景(南から)	図版32	郡家・第7トレンチ出土遺物 小丸子山古墳航空写真
	大倉IV・第1調査区	図版33	小丸子山古墳(東から)
	同・出土遺物	図版34	外ヶ市古墳玄室全景
		図版35	出土遺物 外ヶ市古墳(南から) 左側壁、右側壁

# I. はじめに

## (1)沿革

斐川町は、島根県の東部、神話の国出雲の中心に位置し、北・西・南をヤマタノオロチ退治伝説で有名な一級河川斐伊川に囲まれ、東は美しい夕景や七珍味で名高い宍道湖に面した総面積約73km<sup>2</sup>、人口約2万6千人の町である。（第1図）

町域は標高366mの仏経山を中心とする南部丘陵地帯と、斐伊川によって形成された肥沃な簸川平野に二分される。簸川平野は島根県唯一の穀倉地帯であり、冬の厳しい季節風から屋敷を守る築地松（防風林）を織り込んだ散居集落は、独特的の美景観を醸し出している。

また、島根の空の玄関口、出雲空港を擁する当町は、東へ30分で松江市、西へ10分で出雲市へ通ずる国道9号線や90分で陰陽を結ぶ国道51号線が隣接するなど、交通の便にもめぐまれた地に位置している。

## (2)目的と経過

斐川町は農業を基幹産業としながらも、時代の趨勢とともに近年は企業誘致にも重点を置き、すでに幾つかの先端産業が操業を開始している。今後もゴルフ場開発や高規格道路建設などの大規模開発が計画され、対象地である南部丘陵地帯は次第に様相が変容しつつある。

南部丘陵地帯は、埋蔵文化財の密集地帯でもある。昭和47年発刊の「斐川町史」ではわずか51の遺跡が載せられていたにすぎないが、昭和62年発刊の「島根県遺跡地図Ⅰ」ではその数が一挙に3倍の156ヶ所にも増加している。しかし、遺跡の大半が丘陵地に分布しているため急激な開発の波に晒され、今日、埋蔵文化財は危機的状況におかれており、このような状況の中で、私達は文化財保護の立場から、早急に遺跡の実態を調査し、開発との調整を円滑に進めるべく努力をする必要に迫られてきた。

斐川町教育委員会は、以上のような認識のもとに、平成元年度から3ヶ年かけて国庫補助を得て町全域におよぶ分布調査を実施することとした。調査にあたっては大きく、分布調査・確認調査・測量調査の3本立てで実施することとした。以下は各年度の調査内容である。



第1図 斐川町の位置

平成元年度……学頭・神庭・三絡地内の分布調査（10月～1月）、大倉IV遺跡の範囲確認調査（1月～3月）、小丸子山古墳の墳丘測量（9月）

平成2年度……直江町・神水・出西地内の分布調査（11月～2月）、郡家（長者原）推定地の遺跡確認調査（9月～12月）、外ヶ市古墳の石室測量（1月）

平成3年度……阿宮地内の分布調査（10月～2月）、天寺平廃寺の地形測量（6月～8月）、小丸子山古墳・外ヶ市古墳の補足測量（9月・2月）

分布調査は当面、道路、工業団地、ゴルフ場等の開発が計画されている地域を対象とし、毎年秋から冬にかけて田畠や丘陵地を中心に踏査した。確認調査は、遺跡の範囲や遺物の有無を確認する目的で、大倉IV遺跡と郡家（長者原）推定地の発掘調査を行った。測量調査は、将来の資料に資するために、小丸子山古墳の墳丘測量、外ヶ市古墳の玄室測量、天寺平廃寺の基準点・水準測量を行った。

### (3)歴史的環境

斐川町の南部丘陵地帯は、仏経山（標高366m）を中心として、城平山（300m）、高瀬山（304.7m）、大黒山（315m）へと東に並ぶ山頂列、仏経山から西へ三本松山（140m）に連なる山頂列から成り立っている。地質的には、中世紀白亜紀末より新世代第三紀にいたる間に生成した火成岩や堆積岩が分布している。<sup>(3)</sup>

仏経山北麓は標高30m前後の丘陵がそれぞれ別個な形で張り出しており、これらの間に谷も含め遺跡が多く分布している地域である。（第2図）

本町内では、今のところ旧石器時代の遺跡・遺物は発見されていないが、平成元年に大黒山東麓の穴道町首谷<sup>(4)</sup>で玉髓質角錐形縄石核が表採されており、近い将来、町内でもこの時代の遺物が確認される可能性がてきた。

縄文時代にはいると、丘陵の各地で石斧や石槍、石鐵が採集されている。また、近年の発掘調査で、結遺跡F地区<sup>(5)</sup>から早期末～前期初頭、後谷V遺跡○、武部遺跡①から後・晩期の縄文土器が出土し、次第に資料が蓄積されつつある。結F地区は、低丘陵の奥深い谷に位置し、条痕地瓜形文土器、黒曜石製石鐵などが溝状の落ち込みから多数出土したものである。縄文時代遺跡の立地を考える上で貴重な資料となった。

農耕社会が始まる弥生時代になって、町内では全国的に重要な遺跡である荒神谷遺跡<sup>(6)</sup>（国史跡）が発見される。昭和59年7月、神庭西谷でこれまでの銅劍出土総数を上回る358本の銅劍が斜面中腹から出土した。銅劍は4列に刃を起こした状態で整然と並べられ、いずれも中細形銅劍C類に属するものである。翌60年にも、銅劍出土土地からわずか東へ7mの地点で、今度は銅鐸6個と銅矛16本が同じ埋納跡から出土した。銅鐸は菱環紐式銅鐸1個と外緣付紐式銅鐸5個、銅矛は中細銅矛2本と中広銅矛14本である。荒神谷遺跡の発見は、従来の弥生青銅器論に一石を投じる出来事となつたが、遺跡

の性格、埋納時期、製作地等の基本的な問題は今後に残される結果となった。

集落遺跡としては、斐伊川鉄橋遺跡⑦や西谷遺跡⑥から、弥生時代後期後半から古墳時代初頭の土器が出土しており、荒神谷遺跡との関連で注目されている。

古墳時代前期の古墳は未発見であるが、中期以降になると、仏経山北麓に数多くの古墳が築造される。中期には神庭岩船山古墳⑧、軍原古墳⑨などの人形古墳が丘陵縁辺部に築かれる。神庭岩船山古墳は、現長が48mの前方後円墳で、後円部の頂上に繩掛突起をもつ舟形石棺が残されている。軍原古墳は、径30mの墳丘であるが、山陰本線の鉄道工事によって切り取られ、もとは前方後円墳の可能性が指摘されている。人正15年に後円部の墳頂から長持形石棺が発掘されており、内部に武器、武具、玉類等が副葬されていた。これら大形古墳は首長の墓と考えられる。

中期後半から後期には、丘陵の尾根上に小規模な古墳が連続と築かれる。結古墳群⑩、城山古墳群⑪、三斗萬古墳群⑫などは、1辺(径)が10m前後の円墳や方墳のみで構成される。内部主体は木棺直葬がほとんどで、漆床を伴うものもある。結11号墳は12.5×9×2.1mの方墳で、漆桶の中に

⑬

山陰では珍しい蛇行鉄劍や鉄鎌、刀子が副葬されていた。

後期古墳の代表としては、横穴式石室や横穴があげられる。武部西古墳⑬、出西小丸古墳群⑭、高野古墳群⑮などは、東部出雲の影響を受けたいわゆる石棺式石室系統の石室で、玄室の幅に比して奥行の長いことが特徴的である。出西小丸1号墳は、切石づくりの石室で、玄室閉塞用の切石前面にめずらしい十字形の陽刻が施されている。穴道湖周辺に6例が知られる。

横穴は群をなすものが多く、町内で13ヶ所が確認されている。1～5基で構成される御射山横穴群⑯、剣山横穴群⑰、コモゴ山横穴群⑱、岩海横穴群⑲や数十基で構成される大倉横穴群⑳、平野横穴群㉑、山の奥横穴群㉒などがある。こうした規模のあまり大きくない古墳(横穴)群は、この時代の村落構成員の墳墓と考えられている。

奈良時代の『出雲國風土記』(733年)によれば、本町は出雲國出雲郡にあたり、出雲郡、健部郡、漆治郷、河内郷、美談郷の一部が町域内にあった。出雲郡の政治の中心である郡家は出雲郷内にあったことが記されている。

ところで、風土記に「新造院一所、有河内郷中建立嚴堂也。郡家正南一十三里一百步。後略」という新造院についての一文がある。河内郷の新造院については、從来、出雲市上乗寺や同長者原廢寺が比定されていたが、昭和61年に阿宮地内で天寺平廢寺が発見されたことで、それとの関連で俄かに注目されることとなった。天寺平廢寺㉓は標高200mの山頂に位置し、65×45mの平坦部に2ヶ所の基壇と瓦滴りが確認できる。瓦滴りからは、軒丸瓦、軒平瓦、丸瓦、平瓦の他、埴輪が採集され、瓦の時期は奈良時代後半から平安時代初め頃と考えられている。県内の古代寺院の中で伽藍配置が判明しているものは、松江市出雲国分寺跡、浜田市下府廢寺について3例目となる。

戦国の世になると、月山富田城を中心とした尼子防衛体制のもとで重要な役割りを担った米原氏が

勢力を奮うようになる。米原氏の居城である高瀬城③は、甲ノ丸（大高瀬）、二ノ丸（小高瀬）、三ノ丸（鉄砲立）を拠点とする天然要害の山城で、各方面に大井城④や鷹の巣城⑤などの山城を配し、高瀬防衛体制を強固なものにしていた。

しかし、高瀬城は元亀二年三月、兵糧尽きて落城するまで幾多の戦火の舞台となり、その終演は寂寥るものであった。今はただ、山野に残る五輪塔だけが当時の激戦の跡を物語っている。



第2図 斐川町遺跡分布図

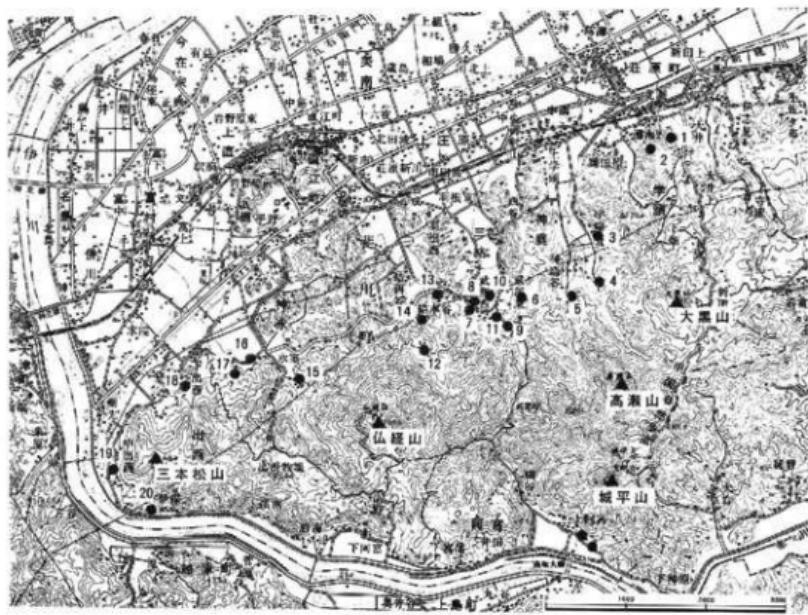
## II. 調査の概要

### 1. 遺跡分布調査

調査は斐川町内の丘陵地を便宜上3地域に分割し、平成元年度から3ヶ年かけて実施した。ただし、平野部の調査は今回は行わなかった。平成元年度は大字学頭、神庭、三絡を中心とした東部丘陵地、平成2年度は大字直江町、神水、出西を中心とした西部丘陵地、平成3年度は大字阿宮を中心とした南部丘陵地をそれぞれ対象とした。

調査にあたっては、5千分の1の地形図を所持し、主として開墾された田畠、低丘陵尾根、山裾で踏査を行った。今回、遺跡として取り扱ったのは、1片でも遺物を採集した地点、あるいは地形的に遺構の存在が想定される地域も含めることにした。

以下、新たに発見された22遺跡の概要を紹介する。（第3図）



第3図 新発見遺跡分布図

(文中の遺跡の頭番号は、地図中の番号と一致する)

## 新発見遺跡一覧表（平成元年度～3年度発見）

地図番号	名 称	種 別	所在地 (大字)	現 態	概 要	遺跡番号
第3-4図-1	欠ノ元1号墳	古 墳	学 頃	山 林	方墳(13×10×1m)	176
第3-4図-2	大 倉 城 跡	城 跡	学 頃	山 林	郭7以上、土橋2	177
第3-4図-3	宇 屋 谷 城 跡	城 跡	神 庭	山 林	郭5、土塁を伴う郭2、掘切2	178
第3-4図-4	宇 屋 谷 II 遺 跡	散布地	神 庭	烟	須恵器5	179
第3-4図-5	神 庭 谷 III 遺 跡	散布地	神 庭	田 烟	須恵器25、土師質土器6	180
第3-7図-6	尾 田 源 II 遺 跡	散布地	神 庭	田 烟	土師質土器1	181
第3-7図-7	三 格 IV 遺 跡	散布地	三 格	田	須恵器1	182
第3-7図-8	三 格 IX 遺 跡	散布地	三 格	田	須恵器1、陶磁器1	183
第3-7図-9	奥 遺 跡	散布地	三 格	烟	黒曜石1	184
第3-7図-10	三 格 X 遺 跡	散布地	三 格	田	須恵器20、陶磁器6、石器1	185
第3-7図-11	三 格 XI 遺 跡	散布地	三 格	田	須恵器1、陶磁器2	186
第3-7図-12	紙 団 原 遺 跡	散布地	直江町	田 烟	須恵器7、陶磁器4	187
第3-7図-13	結 本 谷 III 遺 跡	散布地	直江町	田	須恵器4、土師質土器、陶磁器5	188
第3-7図-14	結 城 跡	城 跡	直江町	山 林	郭25以上、掘切1	189
第3-9図-15	和 西 II 遺 跡	散布地	神 氷	田	土師質土器1、陶磁器2	190
第3-9図-16	小 野 遺 跡	散布地	神 氷	田	須恵器6、土師質土器8、陶磁器2	191
第3-9図-17	押 尾 古 墳 群	古 墳	出 西	山 林	円墳3(径10~20m)	192
第3-9図-18	後谷丘陵古墳群	古 墳	出 西	山 林	円墳1(径15m)、方墳3(辺7m)	193
第3-10図-19	中 出 西 II 遺 跡	散布地	出 西	田	土師質土器1、陶磁器1	194
第3-10図-20	海 の 平 遺 跡	散布地	出 西	山 林	須恵器1、土師器1	195
第3-11図-21	上 阿 宮 I 遺 跡	散布地	阿 宮	田	土師器1、土師質土器2、陶磁器1	199
第3-11図-22	上 阿 宮 II 遺 跡	散布地	阿 宮	田 烟	須恵器4、土師器7、陶磁器3	200

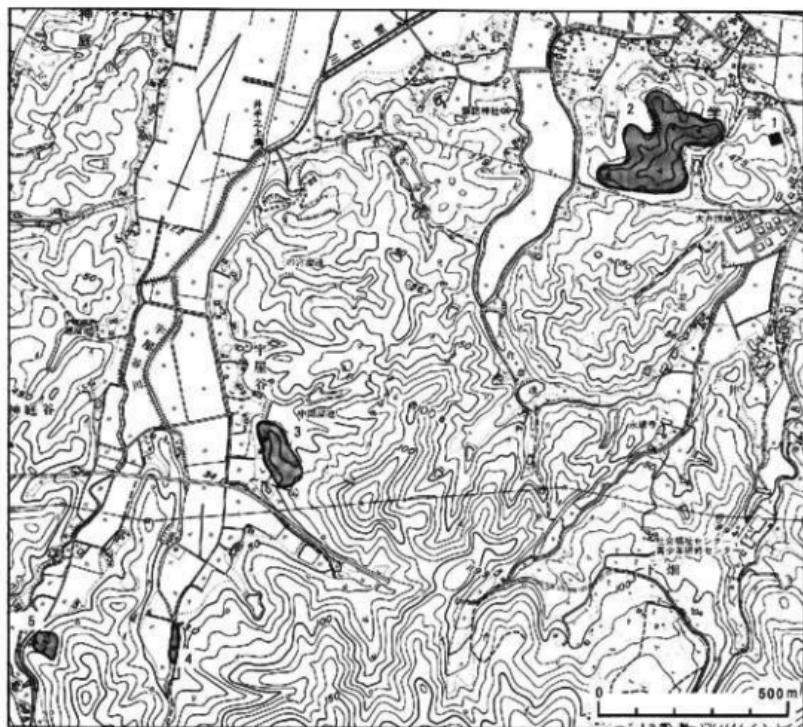
(1). 欠ノ元1号墳(第3・4図)

大黒山（標高315m）の北方2km、標高35mの丘陵に位置し、深田寛氏宅の裏山にあたる。墳形は13m×10mの方墳と考えられ、高さ1mほどの小規模な古墳である。遺物は採集されなかつたが、周囲の屋根上にも幾つかの小古墳が存在するものとみられる。

(2). 大倉城跡 (第3・4・5図)

本城跡は大黒山の北方2km、標高20~49mの丘陵上に位置する。このあたりは丘陵の最北端で、近くに籠川平野、遠くに北山山系(平田市側)が眺望できる絶好の場所である。

本城跡の主郭は、丘陵の最高所に位置する20×10mの平坦部と考えられる。ここから2方向の尾根上に1mの幅で畝状の土橋が通じ、各郭と結ばれている。この土橋は明らかに人为的に構築されたも



第4図 新発見遺跡分布図(1) 1:15,000

のであり、主郭から北へ延びる尾根上（長さ150m）と北西に延びる尾根上（長さ50m）とが確認できる。

主郭から北西方向に通じる土橋の先端部には、 $15 \times 7$ mの長方形形状の西1郭が配され、主郭とは27mの比高差を測る。土橋の西側斜面には3ヶ所の帶曲輪が良く残されている。いずれも $15 \times 5$ m程度の細長い半円形の小規模なものである。

主郭の北側には $15 \times 10$ mの北1郭が緩斜面に配され、そこから北へ通じる土橋が歎状につづき、 $16 \times 10$ mの北2郭に至る。

主郭と北2郭とはほぼ同じ高さを測る。土橋は北2郭の西側をまわり、さらに北に通じる尾根上先端部の北3郭に至る。北3

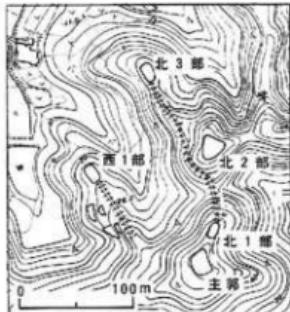
郭は $15 \times 10$ mの長方形形状を呈し、標高31mを測り、本城跡の中で一番北側に位置する平野に面する好所に築かれている。平地との比高差は30mを測る。本城跡は広い篠川平野を見下す位置に築かれ、比較的小さな郭が土橋によって結ばれるという特徴をもち、防禦に適した機能的な山城であったと考えられる。

### (3) 宇屋谷城跡（第3・4・6図）

中世米原氏が居城したといわれる高瀬城跡（標高304.7mの高瀬山）の北1kmのところに、ひとときわ高い権現山（標高134m）がそびえ、ここに鷹の巣城が築かれたと伝えられる。

本城跡は、権現山の西麓に鎮座する神代神社があるあたりから、北へ向かって延びる標高50~60mの舌状の丘陵上に位置する。

本城跡の中心になるのは、土塁を三方に配し、内側に $31 \times 18$ mの長方形形状の平坦部をもつ主郭である。主郭の北と南には深い堀切りや周囲に帶曲輪を配し、防備を強化している。また、主郭の南には堀切をはさんで $37 \times 15$ mの長方形形状の南1郭が、さらに南に一段上って $27 \times 15$ mの南2郭が配される。南1郭の東側角にはわずかに土塁が、北東側には東側斜面に至る小郭が確



第5図 大倉城跡郭配置図 1:5,000



第6図 宇屋谷城跡郭配置図 1:5,000

認される。東側斜面では小規模な腰曲輪が4ヶ所配される。

このように、主郭を中心として築城された本城跡は、単なる防禦的な山城というよりも、背後の鷹の巣城との関連を考慮するなら、何か居館的性格が強い山城ではないかと想像される。

なお、権現山の頂上に大きな岩があるが、ここが『出雲国風土記』に記された「宇夜都弁命が天降った地」といわれる場所である。そして、麓の神代神社は女神（宇夜都弁命）がしづまられた社である  
といふ伝承が残されている。

#### (4). 宇屋谷Ⅱ遺跡（第3・4図）

大黒山から北西にのびる丘陵と、高瀬山から北にのびる丘陵に挟まれた南北に細長い谷（宇屋谷）の中程に位置する。遺跡は現在水田、畑地に利用され、標高45mを測る。採集された遺物は須恵器坏類1と壺片4である。

なお、この付近の畑には、近くに道路を建設した際の残土が盛ってあるとのことから、採集したそれらの遺物の中には、その時に土といっしょに運搬されてきた物もあると考えられる。

#### (5). 神庭谷Ⅲ遺跡（第3・4図）

宇屋谷Ⅱ遺跡がある谷（宇屋谷）とは丘陵を挟んで西側の谷（神庭谷）に位置する。遺物は標高10.5mの丘陵の西側裾部にある畑で採集された。古墳時代から平安時代にかけての环類、壺など須恵器25と土師器、土師質土器6がある。

#### (6). 尾田瀬Ⅱ遺跡（第3・7図）

国指定史跡・荒神谷遺跡（銅劍358、銅鐸6、銅矛16が出土した遺跡）がある谷（西谷）の最奥部に位置する。荒神谷遺跡からは南へ500mのところにあたり、三方を丘陵に開まれた棚田状の谷地田がある。遺物は田の畦際から土師質土器1が採集された。

#### (7). 三絡Ⅷ遺跡（第3・7図）

高瀬山の北西、仏経山の北東に東西0.3km、南北1.5kmの広さの大きな谷（武部谷）がある。遺跡はこの谷奥部の標高25mの水田に位置する。遺物は水田跡から須恵器1が採集された。

#### (8). 三絡Ⅸ遺跡（第3・7図）

三絡Ⅷ遺跡の北に隣接する標高20mの水田に位置する。

採集された遺物は須恵器1、陶磁器1である。陶磁器は17世紀代の伊万里碗で高い高台がつくもので、見込部に水平線に太陽を描いた文様がみえる。

(9). 奥遺跡（第3・7図）

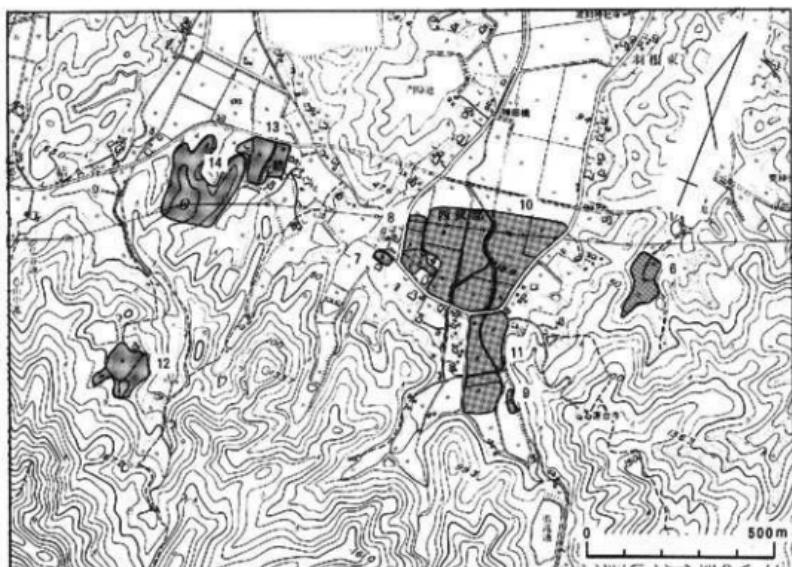
三格IX遺跡をさらに南側の谷奥へ入った標高35mの狭い水田に位置する。採集された遺物は黒曜石製の石鎚未成品1である。

(10). 三格X遺跡（第3・7図）

三格IX遺跡の東に隣接する標高20m前後の水田に位置する。遺物は東西300m、南北250mの広い範囲で採集された。石鎚1、須恵器20、陶磁器6がある。石鎚は黒曜石製で無茎の二等辺三角形状を呈す。長さは2.2cmを測る。須恵器は立ち上がりを有する壺や壺片で山本須恵器編年IV期以降のものである。陶磁器には16世紀代の中国産染付皿や伊万里碗、鉄軸文様を施した唐津がある。

(11). 三格XI遺跡（第3・7図）

三格X遺跡のさらに南側の谷奥に位置する。標高25~30mの水田である。採集された遺物は須恵器1、陶磁器2である。陶磁器には唐草文をもつ伊万里皿、唐津皿がある。



第7図 新発見遺跡分布図(2) 1:15,000

#### (12) 紙園原遺跡（第3・7図）

仏経山の北東1kmに紙園神社が祀られている。遺跡はこの神社の東斜面に広がり、標高100mの高所に立地する。採集された遺物は須恵器1、土師質土器1、陶磁器3である。須恵器は高环や甕類、土師質土器は糸切り痕をもつ皿、陶磁器には中国産染付、伊万里皿、唐津皿がある。

#### (13) 結本谷Ⅲ遺跡（第3・7図）

仏経山の北東にのびる丘陵の縁辺部に位置し、結谷の最奥部にあたる。遺跡は標高24~29mを測る水田の広い範囲に存在する。採集された遺物は須恵器4、土師質土器1、陶磁器5である。須恵器は高环類、陶磁器は刷毛目唐津、伊万里皿と高台付碗などが認められる。

#### (14) 結城跡（第3・7・8図）

本城跡は、小さな谷を挟み込むように馬蹄形に広がる。標高60mの丘陵上に築かれている。

西側の尾根上には4つの郭が認められる。

先端部の2つの郭から主郭に向かって、尾根の両側を削り取った幅約1.2mの土橋、不整形な郭が続き、最頂部の主郭に至る。

主郭は、高圧線鉄塔建設時に大きく削平されてしまい、一部を残すのみである。

東側尾根上の鞍部には、自然地形を利用した堀切りが認められ、先端部に向って小郭が連なる。

この2つの尾根に挟まれた谷部は、侵入してきた敵を包み込むように多くの郭が配置されており、「結城跡」の最も重要な位置を占めていたと考えられる。

なお、後方にあたる南尾根上には郭と考えられる明確な構造は認められなかった。



第8図 結城跡郭配置図 1:5,000

以上のことから、「結城跡」は北方の敵に対する「砦」跡と考えられる。

#### (15) 和西Ⅱ遺跡（第3・9図）

仏経山の北西麓の小さな谷間に延命山本誓寺があり、遺跡はその東側の標高15mの水田に位置するが、周辺の地形から遺跡の範囲はあまり広くはならないと考えられる。

採集した遺物には土師質土器1、陶磁器2がある。陶磁器は17~18世紀頃の瀬戸系磁器皿と高台付碗である。

#### ⑩. 小野遺跡（第3・9図）

仏経山の北西方向、標高130mの丘陵の北側縁辺部にある。標高9mの水田で広範囲に遺物が採集された。遺物の量からみて、かなり良好な集落跡が存在するものと考えられる。須恵器6、土師器3、土師質土器5、陶磁器2がある。須恵器は壺類、土師質土器は皿類であろうがいずれも小片である。他に唐津系陶器がある。

ちなみに、小野という名は旧小字であるが、由来はそこに小野小町地蔵が祀られていることから名付けられたと伝えられる。

#### ⑪. 押屋古墳群（第3・9図）

仏経山の西方、標高50～60mの北へ延びる丘陵尾根上に円墳3基が存在する。付近には10基近くの古墳が群集する長者原古墳群がある。

最も北側に位置する1号墳は径20mを測り、墳頂部に礫が散乱し、中央部は盗掘あるいは陥没孔がある。2号墳は径20mで、群中最も高い位置にある。3号墳は径10mで、墳頂部に2～3の石が露出していて、墳丘の残りも良くない。遺物は採集されなかった。



第9図 新発見遺跡分布図(3) 1:15,000

#### 08. 後谷丘陵古墳群（第3・9図）

仏経山の西方 2.5kmに月光山栖雲寺がある。古墳群は寺の裏山にあたり、標高40mの丘陵が北東に延びる尾根の中程に位置する。古墳は円墳1基、方墳3基である。

1号墳は径15mの円墳で群中最も大きく、立地も高い位置を占める。2～4号墳は一辺7～8mの方墳で、尾根筋に直交した溝をもつ小さな古墳である。周囲の余地を考えると他にも古墳がある可能性がある。遺物は採集されなかった。

#### 09. 中出西II遺跡（第3・10図）

本町の最西端に標高140mの三本松山がそびえる。遺跡はこの山の北西麓の砂地の水田にあり、標高14mを測る。採集された遺物には土師質土器1と、18世紀頃地元の窯で製作されたと考えられる唐津系の高台付瓶1がある。

#### 10. 海の平遺跡（第3・10図）

三本松山の南麓に位置する標高80mの丘陵の山裾にあたる。ここは現在梅林で、梅の木の掘り穴から須恵器甕片1と土師器1が採集された。遺物は狭い平坦面で採集したが、周囲の斜面に横穴が存在する可能性がある。



第10図 新発見遺跡分布図(4) 1:15,000

(21). 上阿宮 I 遺跡

(第3・11図)

本町の南東部、斐伊川を見下す位置に城平山（標高316m）がそびえる。遺跡はこの山の南麓、標高27mの台地上に存在する。遺物が採集されたのは水田部で、土師器1、土師質土器2、唐津系の陶磁器1がある。

(22). 上阿宮 II 遺跡

(第3・11図)

上阿宮 I 遺跡の西100m

の台地上に位置する。遺物は水田や畠部分で須恵器4、土師器7、陶磁器3が広範囲に採集される。須恵器は内面にかえりを有する蓋や壺類の口縁部、陶磁器は朝鮮産の青磁碗や唐津系陶磁器などがある。



第11図 新発見遺跡分布図(5) 1:15,000

## 2. 大倉IV遺跡

本遺跡は、大黒山の北に派生する丘陵の谷間に位置する。この谷は南北650m、東西50m~100mと狭長で、現在は全域を水田として利用されている。（第12図）

遺跡発見のきっかけは、昭和40年代に行われた圃場整備の際に多くの土器類が発見され、その後、土地の耕作者も開墾中に土器を探集していたことによる。

このように、遺跡は水田下に良好な状態で遺存していることが考えられる。今回は遺跡の範囲、性格等を探る目的で土器採集地点を中心に7ヶ所の調査区を設定した。

各調査区は3×3m四方で、谷の中央部を避け山裾に近い場所に設定した。これは旧地形を確認するためである。（第13図）



第12図 大倉IV遺跡の位置 1:25,000



第13図 調査区配置図

調査の結果、第1と第4調査区で地山を確認することができたが、他の調査区では堆積土が深すぎて危険なため調査を途中で中止せざるを得なかった。

第4調査区は溝状遺構が2条検出され、溝内から多数の遺物が出土した。これらの遺物は古墳時代初めから奈良時代にかけての土師器や須恵器を中心とする。他に碧玉や砥石などもみられ、町内では初めての玉作関連の遺物が出土したことになる。

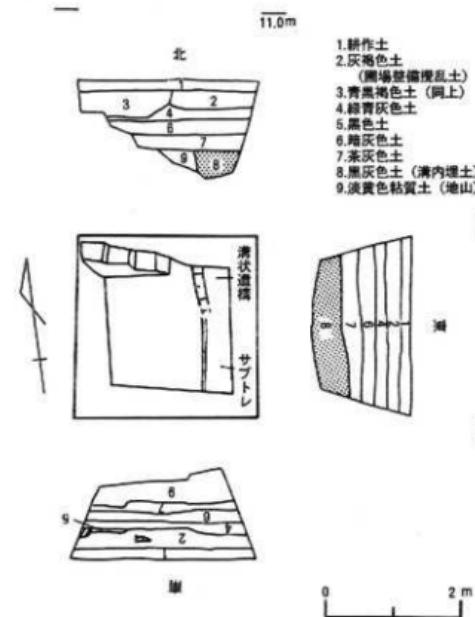
以下、各調査区ごとに概要を記すこととする。

#### 第1調査区

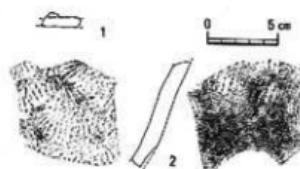
この調査区は本遺跡の最南端、標高10mの水田面に位置し、地表下0.8mまで掘り下げた。

耕作土と圃場整備による擾乱土（厚さ20~40cm）を除去すると、緑青灰色土と暗灰色土が共に40cmの厚さで整然と堆積し、さらに小礫混りの茶灰色土が20~60cmの厚さで地山上に堆積している。

調査区の東寄りの地山面で、ほぼ南北に走る溝状の落ち込みが確認された。サブレンチと重なって、溝の様子が良くわからないが、溝幅は70cm以上、深さは40cmを測る。溝内には小礫混りの黒灰色土が全面に堆積している。（第14図）  
遺物は茶灰色土中から2点出土した。第15図1は輪状つまみを有する須恵器壺蓋、2は甕の胸部である。（第15図）



第14図 第1調査区 1:80

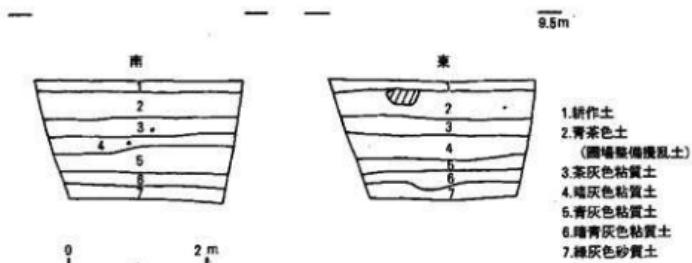


第15図 第1調査区出土遺物 1:4

#### 第2調査区

この調査区は第1調査区の北75m、標高8.6mの水田面に位置し、地表下1.7mまで掘り下げた。

耕作土と圃場整備による擾乱土（厚さ30cm）を除去すると、その下に比較的しまった茶灰色土が均一に見られる。さらに暗灰色系と青緑色系の土層が20~30cmの厚さで交互に堆積している。（第16図）遺物は茶灰色粘質土中から土師質土器、暗灰色粘質土中から土師器が出土したが、図示し得なかった。



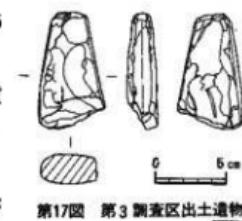
第16図 第2調査区 1:80

### 第3調査区

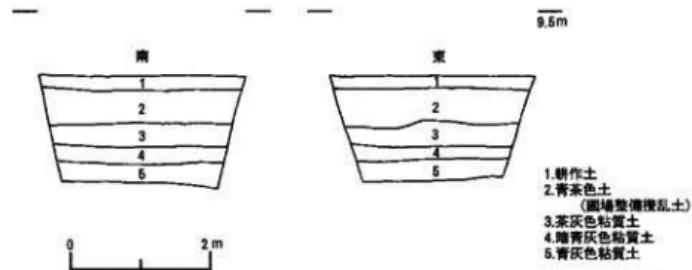
この調査区は第2調査区の北東35mの同じ水田面に位置し、地表下1.5mまで掘り下げた。

耕作土と圃場整備による擾乱土（厚さ45cm）を除去すると、茶灰色粘質土、暗青灰色粘質土、青灰色砂質土が25~35cmの厚さで堆積している。（第17図）

遺物は暗青灰色粘質土中から石斧が出土した。石質は頁岩で、刃部が欠損している。長さ8.2cm、幅2.5~4.7cm、厚さ2cmを測る。（第17図）



第17図 第3調査区出土遺物 1:4



第18図 第3調査区 1:80

### 第4調査区

この調査区は第3調査区の北北東100m、標高7.5mの水田面に位置する。

耕作土を20cm除去した段階で、すぐに地山を検出することができた。これは、調査地が丘陵の西側縁辺部にあたり、地山の遺存が良かったためと思われる。この地山面から、溝状遺構2条（SD-1、

SD-2)、ピット1穴(SP-1)が検出された。(第19図)

SD-1は、調査区の南から北東方向にのびるが、途中で東や西へ枝分れしており、全体の形状は不明である。中心となる溝の全長は3.5m以上、溝幅は一定しないが上幅で最大1m、下幅で最小0.4mを測る。深さは0.4~0.5mを測り、溝底はほぼ平らで、溝壁は斜め上方に立ち上る。溝内には炭化物や小礫を含む灰黒色粘質土が堆積している。

SD-2は、調査区の西寄りで検出され、SD-1と平行してのび、中程からくの字状に方向を変える。溝の全長は1.3m以上、溝幅は上幅で0.3m、下幅で0.15mを測る。深さは0.28mを測る浅い溝である。

SP-1は調査区の北寄りに位置し、直径23cm、深さ18cmの円形ピットである。SD-1と重複して作られているが、時期等は不明である。

遺物は耕作土中からはわずかで、ほとんどはSD-1とSD-2内の堆積土中から出土し、その数は破片にして約1,200点にもなる。

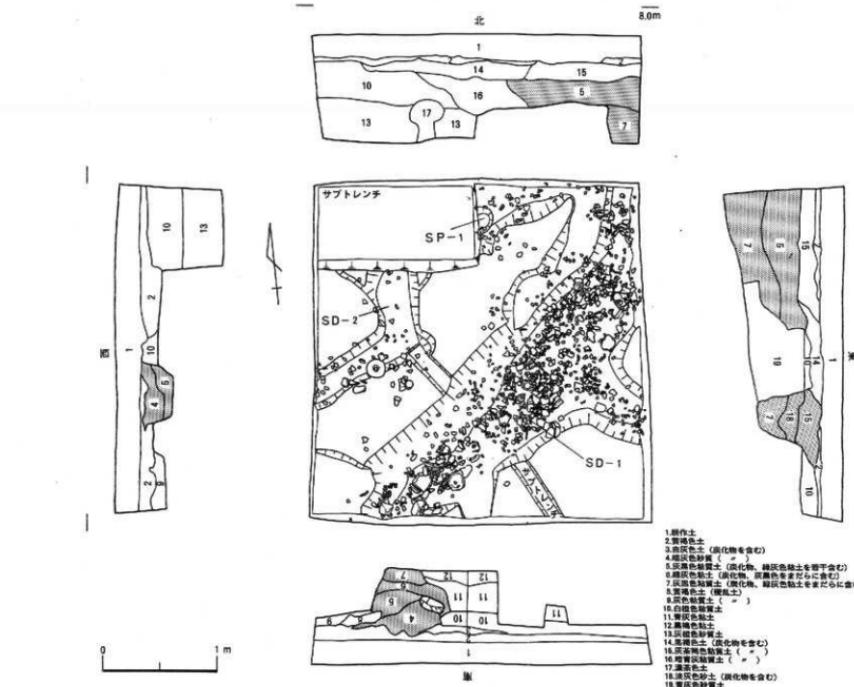
土器類では土師器壺、甕、高環、直口壺、手捏土器等、須恵器蓋環、高環、甕等、石器類では碧玉、砥石、叩石等がある。また、桃の種子も1点だけ出土した。

第20図1~24は土師器である。1は口径26cmを測る複合口縁を有する壺である。頸部は短めで、張りの大きい肩部をもつ。口縁部の稜は横方向に突出し、端部は丸い。内外面に横ナデが施される。肩部外面には刺突による羽状文3帯が施され、胸部には横方向のハケ目がかすかに残る。頸部外面は指頭圧痕がみられ、胸部以下はヘラ削りが施される。胎土は砂粒を多く含み、焼成は普通、褐色を呈する。2・3は口径14・16cmを測り、複合口縁を有する甕である。共に、口縁部の後に鋭さはない。2は磨滅により、調整等不明である。3の頸部はくの字状に屈曲する。肩部外面には4条の波状文、体部外面にはハケ目、内面にはヘラ削りが施される。4は稜が鈍く退化した口縁部を有する甕である。口縁部は外傾し、端部は丸い。内外面に横ナデが施される。

5・6は口径12.9・15cmを測る単純口縁を有する広口壺である。共に、器壁は厚く、口縁端部は平らにカットされるが、カットの方向が異なる。6の体部外面にハケ目が施される。

7~10は口径15.4~20cmを測る単純口縁の甕である。口縁部はいずれもくの字状を呈し、端部は丸い。7・8の口縁部外面は横ナデ、体部外面はハケ目、内面はヘラ削りが施される。9は磨滅のため調整不明である。10は口縁部が大きく開き、内外面に横ナデが施される。

11~19は高環である。環部に段を有するもの(11)、不明瞭な稜をもつもの(12)、碗形のもの(13)がある。11は口径18.1cmを測り、口縁部と体部の境に退化した段を有し、口縁部は短く外反する。环部と脚部との境は粘土板が充填される。环部外面は横ナデが施される。胎土は微砂粒を含み、焼成は普通で、暗茶色を呈する。12は口径15.9cmを測り、外反する口縁を有し、体部との境は稜をなす。环部外面にかすかにハケ目が認められる。13の环部は碗形を呈し、口縁部との境に段をもたない。脚部との境に粘土板が充填される。环部外面はハケ目が施される。



第19図 第4調査区 1-80

14・15は環部から脚部にかけての高环で、14は15に比べ環部が開くものである。16は円錐状を呈す、中空の脚部である。脚部外面上方にかすかにハケ目が認められる。17は円筒状にのびた裾部が八の字状に開く、中実の脚部である。18は八の字状に開く裾部を有す。19は八の字状に開く裾部から内湾気味に立ち上る脚部である。裾部外面に指頭圧痕が残り、内面にヘラ削りが施される。脚部径9.9cmを測る。

20は小形の直口壺である。口径6.6cm、器高7.7cmを測る。口縁は短く上方にのび、肩は張らず体部中央に最大径をもつ。体部内外面に指頭圧痕が残る。

第21図21は環部に強い屈曲を有す特異な形の高环であろう。脚部との境に充填した粘土板が突起状に露出している。器壁は厚く、胎上は密。焼成は普通で、淡茶色を呈する。

22~24は手捏土器である。いずれも指頭圧痕が明瞭に残る。22はコップ形を呈し、体部下半に穿孔が認められる。口径9.5cmを測る。23は22よりも口縁部が大きく開き、器高は低い。口径10.2cmを測る。24は小形品で、口径3.9cmを測る。

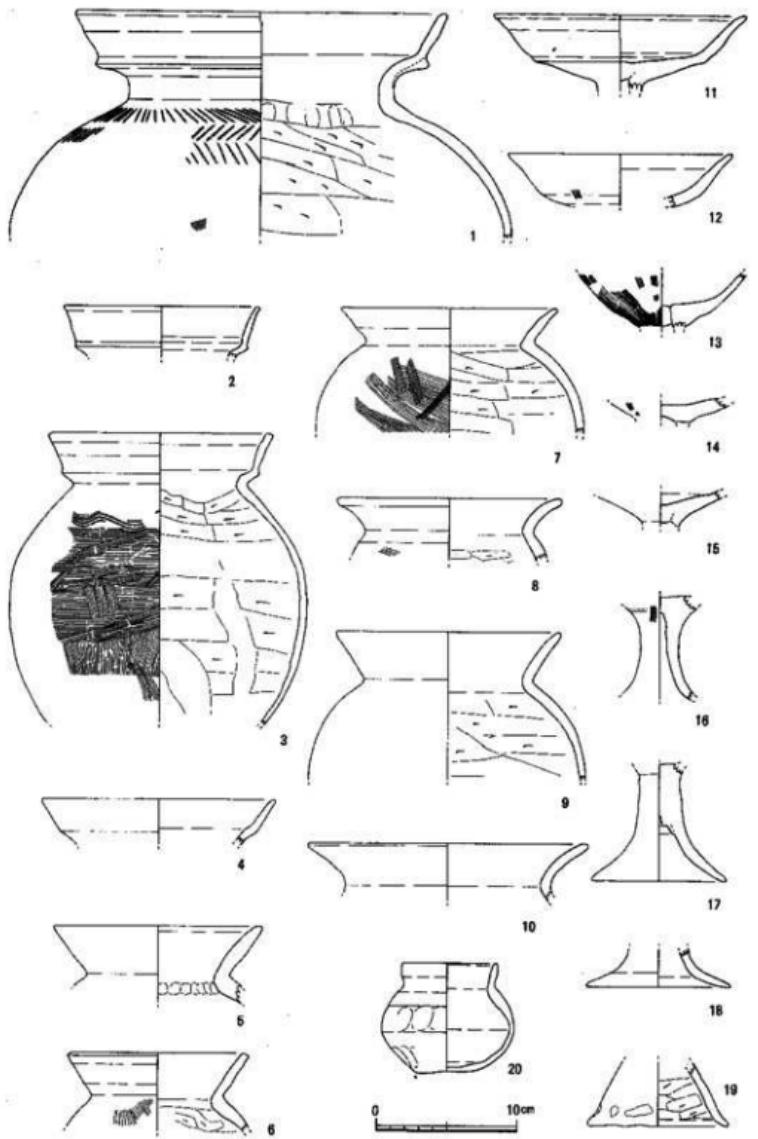
第21図25~45は須恵器である。25~38は蓋環類である。25はやや平坦な天井部と口縁部との境に短く鋭い稜がつき、端部は内側に段を有する。内外面とも回転ナデが施される。口径12cmを測る。26の口縁部はやや外傾して垂下し、端部は内側に沈線を有す。天井部との境は幅0.8cmの凹線で稜を作り出している。天井部外面はヘラ削り、口縁部内外面は回転ナデが施される。口径13.8cm、器高3.4cmを測る。27は全体に丸みをもち、口縁部と天井部との境は沈線と凹線状の凹みによって稜を作りだしている。天井部外面はヘラ削り、口縁部内外面は回転ナデが施される。28の口縁端部の内側に浅い沈線を有する。天井部との境は不明瞭な稜線がめぐる。口径12.1cmを測る。29は口縁部と天井部との境にわずかな稜を有す。天井部外面はヘラ削り、口縁部内外面は回転ナデが施される。30は内面にかえりを有し、天井部はやや丸みをもつ。口縁部は回転ナデが施される。

31~33は口径11~12.1cmを測る环身である。立ち上り部の高さは31が1.2cm、32が1.1cm、33が0.8cmを測る。いずれも端部は丸みを帯び、口縁部内外面は回転ナデが施される。

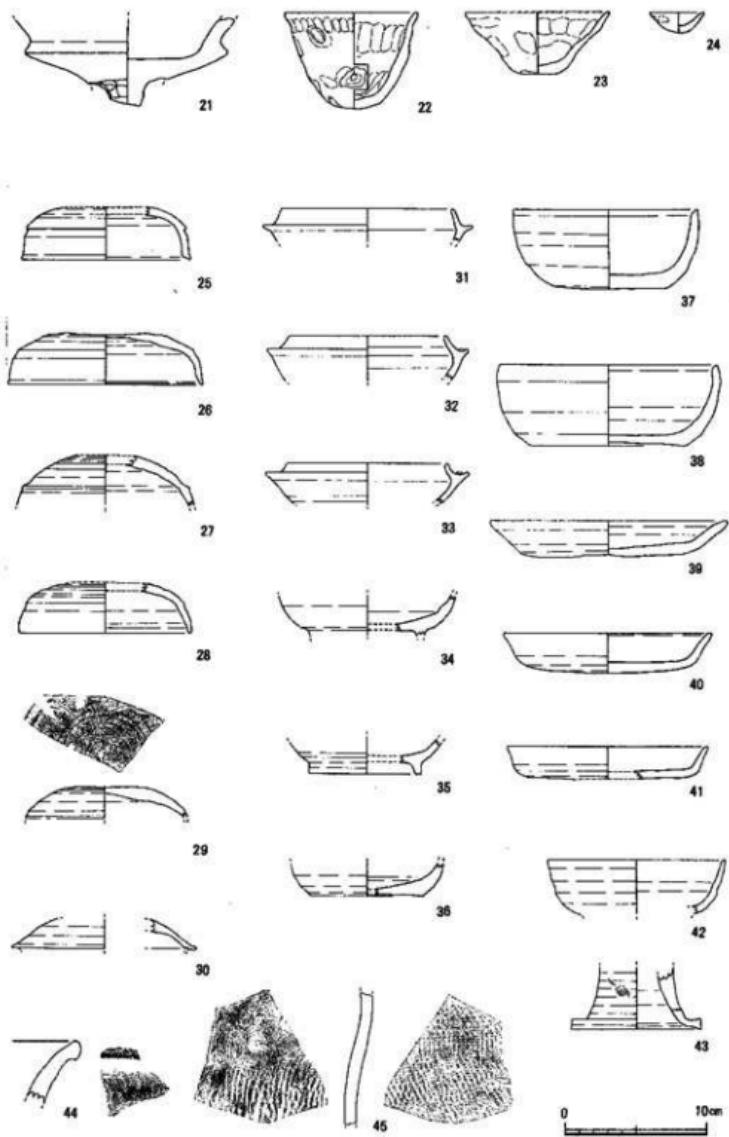
34・35は高台付き环である。34は傾斜する底部から屈曲して斜め上方に至る。体部外面はヘラケズリのあとナデ調整、内面は回転ナデ後、仕上げナデが施される。35は底径7.9cmを測り、高台はやや外傾して低く、端部は沈線状にくぼむ。

36~38は無高台の环である。いずれも内湾気味に立ち上るるものである。36の底部と体部の境は、角張るものである。底部外面には回転糸切りがみられる。37は口径13cm、器高5.7cmを測り、口縁端部は若干くびれる。口縁部と体部は内外面回転ナデ、底部外面は回転糸切りがみられる。焼成は不良で、淡橙色を呈す。38は口径15.2cm、器高5.8cmの大形である。体部は内湾して立ち上がる。口縁部内外面とも回転ナデ、底部外面は回転糸切りである。

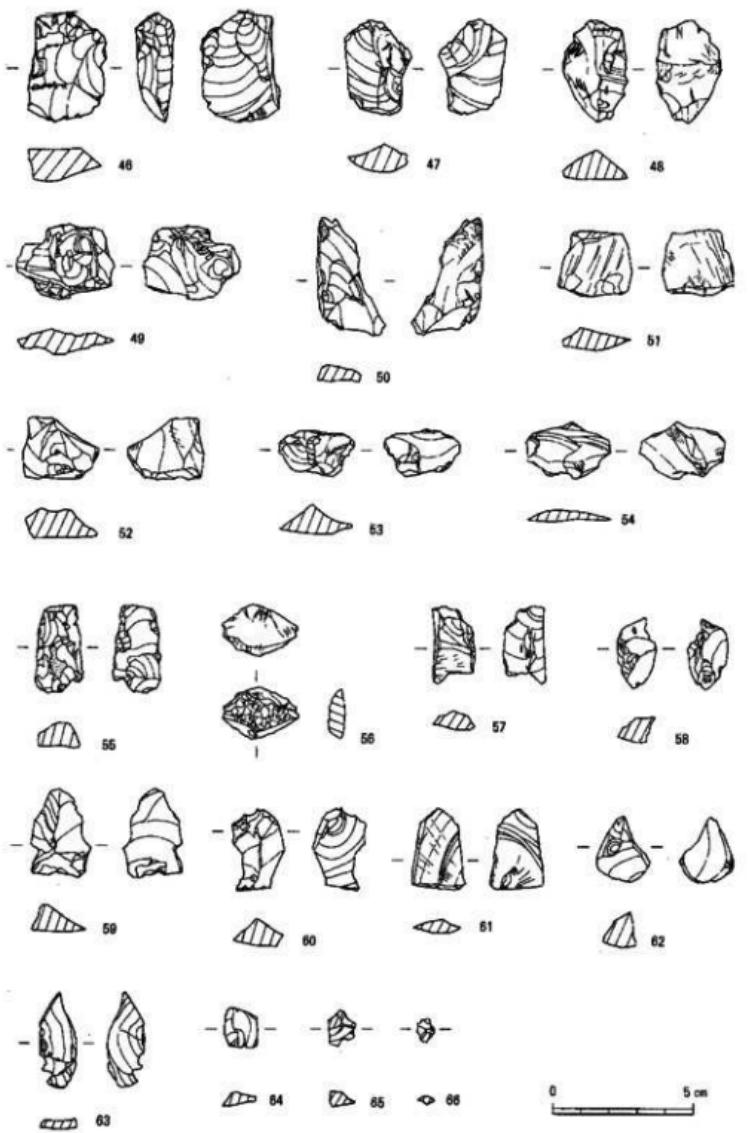
39~41は皿である。39は口径16.6cmを測り、器壁は厚い。底部から直線的に大きく開き口縁部に至



第20図 第4調査区出土遺物(1) 1:4



第21図 第4調査区出土遺物(2) 1:4



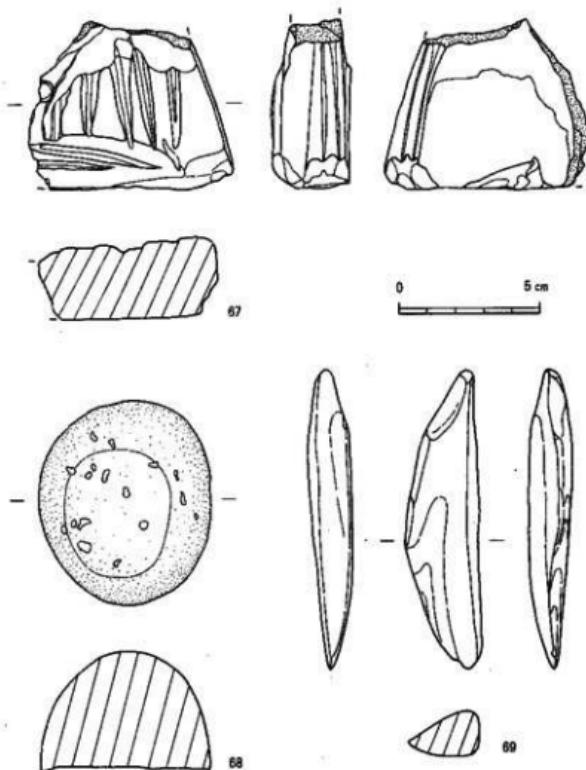
第22図 第4調査区出土遺物(3) 1:2

る。底部外面はかすかに回転糸切りを残す。40は口径14.7cmを測り、底部から短くわずかに外反して口縁部に至る。調整は不明、焼成は不良で、淡橙色を呈す。41は口径14.2cmを測る。底部から屈曲して斜め上方に短く立ち上がる。底部外面は回転糸切りを残す。

42・43は高環である。42は口径12.4cmの坏部で、体部は外面に回転ナデを明瞭に残す。43は底径9.1cmを測る脚部である。据部から屈曲して外方にのび端部に至る。脚部は透しが1孔認められる。胎土中に黒色タール様の斑点を含む。

44・45は壺片である。44は壺口縁部で、端部は外下方に突帯状に肥厚する。口縁外面に7条の波状文が施される。45は壺の脚部下半と思われ、器壁0.9cmを測る。

第22図46～66は碧玉製の剥片で、いずれも人為的に打ち欠いた痕跡が認められる。長さ0.8～3.9cm、



第23図 第4調査区出土遺物(4) 1:2

重さ0.1~13.3gを測る。55は管玉未製品の可能性がある。

第23図67は砂岩製の砥石である。長辺6.5cm、短辺4.9cm、厚さ2.8cmを測る。二面は欠損しているが、他の三面にV字形の溝9条や平らな研磨面が認められる。玉類の研磨と同時に、鉄製工具等の研磨にも使用されたものと考えられる。

68・69は不明石器である。68は半円形を呈する河原石である。表面は石英がとばされて穴になったり、磨滅したりしている。石質は流紋岩である。

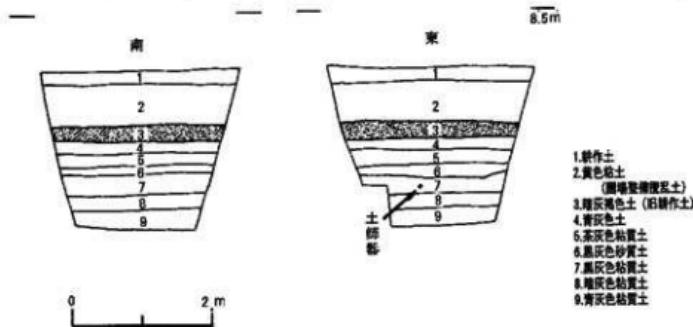
69は断面三角形を呈する刃器であろうか。石質は頁岩で、長さ10.5cmを測る。

## 第5調査区

この調査区は第4調査区の東75mの同じ水田面に位置し、地表下2.3mまで掘り下げた。

耕作土と圃場整備による擾乱土(厚さ60cm)を除去すると、旧耕作土と思われる暗灰褐色土が検出された。旧耕作土の下には、青灰色土、茶灰色粘質土、黒灰色砂質土がそれぞれ30cm、35cm、12cmの厚さで漸移的に堆積している。さらにその下には暗灰色や青灰色の粘質土が堆積している。(第24図)

遺物は黒灰色粘質土中から土師器が出土したが、図示し得なかった。

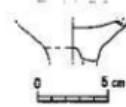


第24図 第5調査区 1:80

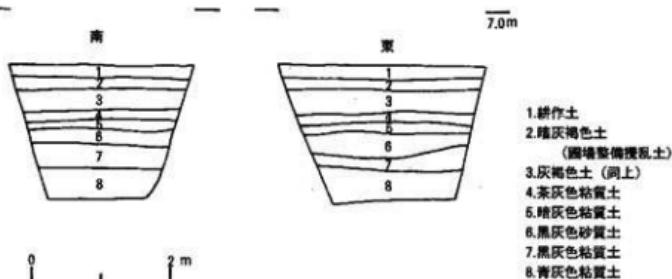
## 第6調査区

この調査区は第5調査区の北100m、標高6.2mの水田面に位置し、地表下1.9mまで掘り下げた。耕作土と2層にわたる圃場整備による擾乱土(厚さ50cm)を除去すると、茶灰色・暗灰色粘質土が25cm、黒灰色砂質土が2cm、黒灰色・青灰色粘質土が40cmの厚さで堆積している。基本的に第5調査区と同様な堆積状況である。(第26図)

遺物は黒灰色粘質土中から土師器高杯が出土した。(第25図)



第25図 第6調査区出土遺物 1:4



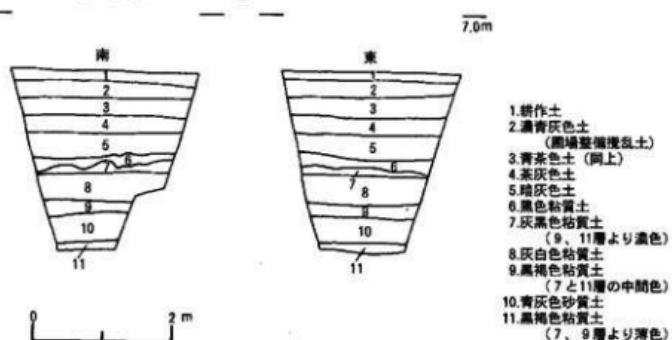
第26図 第6調査区 1:80

### 第7調査区

この調査区は第6調査区の東45mの同じ水田面に位置し、地表下2.6mまで掘り下げた。

耕作土と2層にわたる圃場整備による擾乱土(厚さ50cm)を除去すると、茶灰色と暗灰色土が25~30cmの厚さで堆積し、その下に黒色粘質土と灰黑色粘質土が波状に堆積している。ここが、旧耕作土と考えられよう。さらにその下には青灰色系の砂質土層と黒褐色系の粘質土層が交互に堆積している。  
(第27図)

この調査区から遺物は出土しなかった。



第27図 第7調査区 1:80

### 小 結

以上、南北に細長い谷あいに存在する本遺跡の中心は、丘陵の縁辺部にあたる第4調査区周辺に広がっていることが知られた。

第4調査区はわずか9m<sup>2</sup>の調査面積ではあったが、1,200点もの土器片が出土し、溝状遺構が検出された。これにより、水田下での遺構の遺存状況はかなり良好で、周囲に大きな集落遺跡を予感させる結果となつた。

出土遺物の時期についてみると、土師器は壺や甌に複合口縁を有するものから退化したもの、さらに単純L型縁化したものもあることから、松江市堤廻遺跡と相い似た時期が想定され、古墳時代前期から後期にかけての所産と考えられる。また、須恵器については、山本須恵器編年I期の壺蓋<sup>(21)</sup>1点があるものの、大半はIV期以降のものである。IV期の中でも、この時期を細分している高広編年と比較すると、高広I-B期、II-B期、IV-A期に対応する。従って須恵器は古墳時代後期から奈良時代末期頃までの所産と考えられる。

出土遺物の中で、碧玉や砥石、叩石などが出土したことは、とくにこの遺跡を性格づけるものであろう。近隣での碧玉出土例は少なく、出雲市矢野遺跡や古志本郷遺跡、田畠遺跡等数例が知られているにすぎず、長作関係の遺跡として今後注目されるであろう。

### 3. 郡家（長者原）推定地

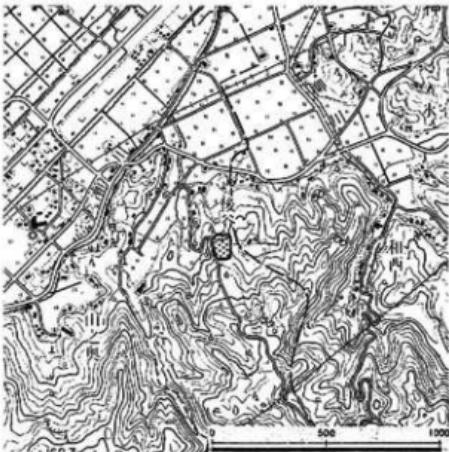
本推定地は、仏経山の西北西 2 km、大字出西（旧字）稻木谷に所在する。三方を丘陵に囲まれた谷間にあたるが、標高は 50m 前後と高い所に立地する。（第28図）

ここは、今までの分布調査で遺物等が発見されたことがなかった。しかし、天保年間の『出雲風土記考』（横山永福著）の「山雲郷即属郡家」条の中で、山雲郡家を水室・神守の地に求めていることから、今回「長者原」の地を郡家推定地の一つとみなした。「長者原」は、大字出西と神水の境に位置し、昔、この地に長者が住んでいたという伝説に由来して、通称でそう呼ばれている地域である。

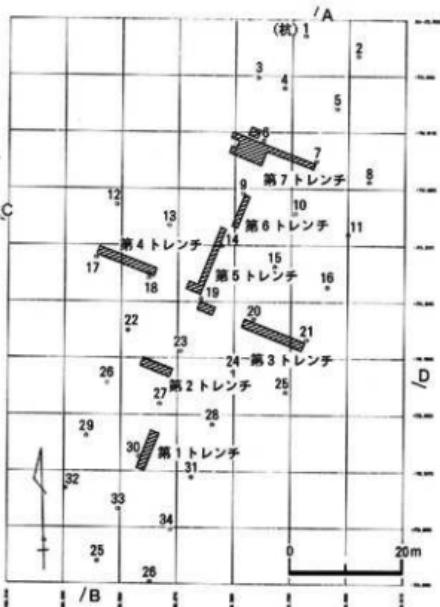
調査はまず、地形にあわせて 10m 間隔の方眼坑を 36ヶ所設け、8ヶ所のトレンチを設定した。各トレンチは、以下、第 1～第 7 トレンチと呼称する。（第29・30図）

調査の結果、各トレンチは相当量の土砂が堆積しており、表土から 1.5～3 m 挖り下げて、ようやく黒褐色土層（旧表土と考えられる）が確認されるといった状況であった。ただ、第 7 トレンチだけは比較的浅かったため若干の拡張を行うことができたが、その範囲内では明確な遺構を確認することができなかつた。遺物は数の多少はあるものの、どのトレンチからも出土した。須恵器、土師質土器を中心として合計 335 片がある。

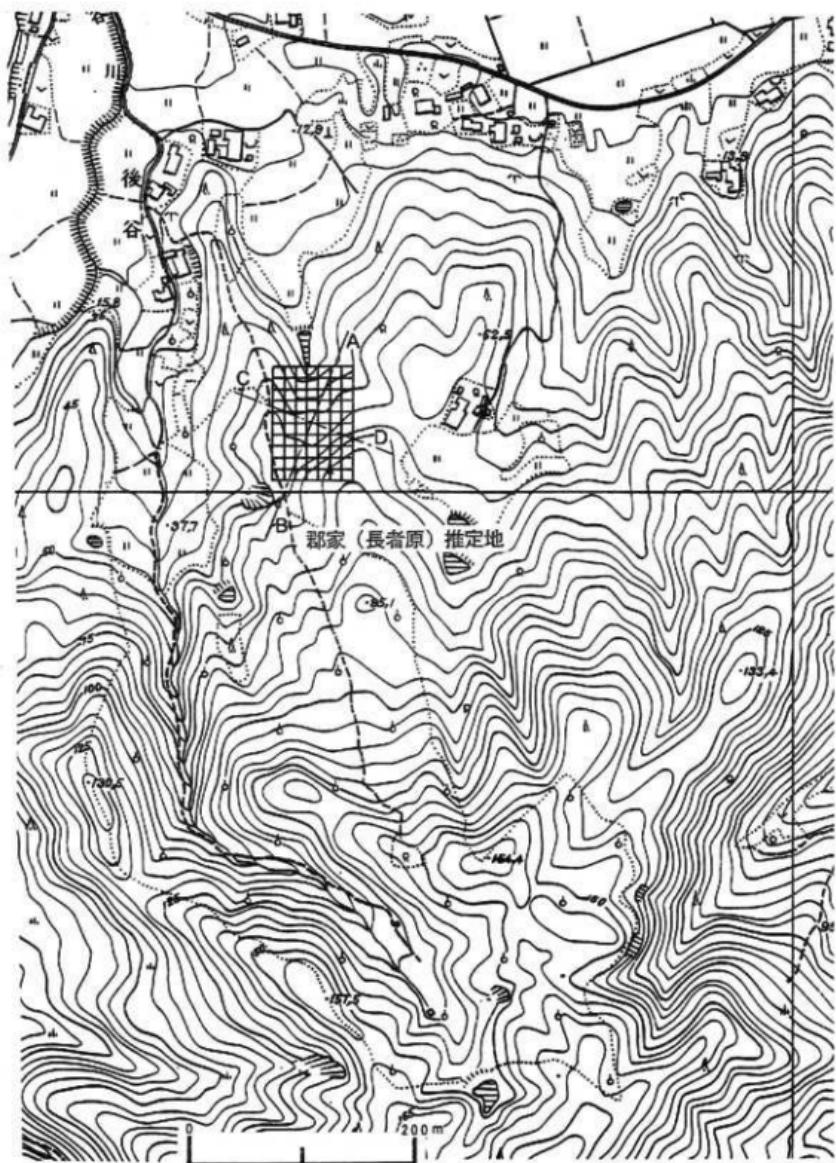
以下、各トレンチの概要を記すこととする。



第28図 郡家（長者原）推定地の位置 1:25,000



第29図 トレンチ配置図 1:1,000



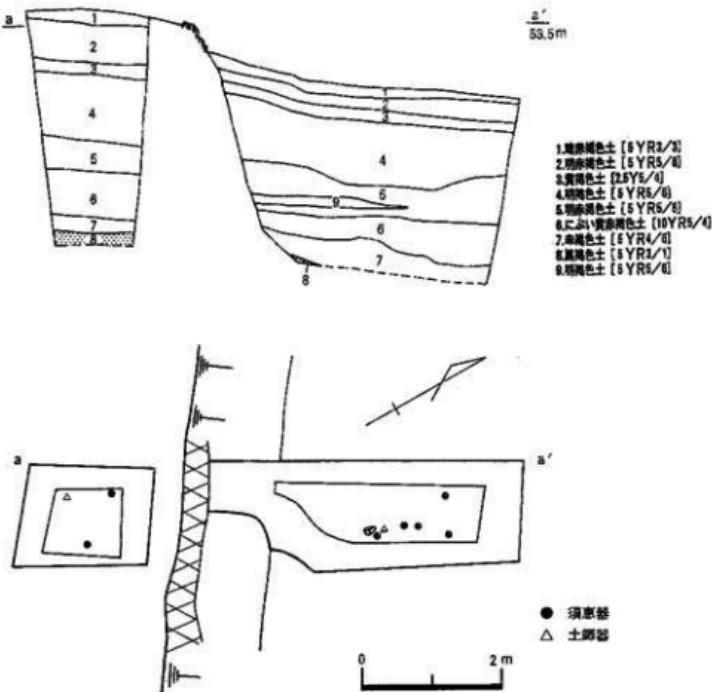
第30図 方眼設定図 1 : 5,000

## 第1トレンチ

このトレンチは、標高53mに位置する谷の最奥部にある。 (杭) 27～(杭) 33ラインの中程に、人小の礫を積んだ幅7.8m、高さ1.3mの石垣が認められる。トレンチは石垣に直交する形で、7×1.5mの範囲を設定した。

土層は、表土下に黄褐色土や赤褐色土が2.6～3.2mの厚さで、非常に厚く、堆積している。この間の層には、6回にわたって土砂が漸移的に堆積した状況が見られ、各層は下になるほど小礫が多く混じる。遺物等は皆無である。以上の層は、以下の第2～第7トレンチでも同じように堆積し、現況の谷を形成している層である。(第31図)

表土下3.2mまで掘り下げて、ようやく黒褐色土が検出され、この層から須恵器7、土師器2が出土した。須恵器环身は口径12.2cmを測り、体部が内湾気味に立ち上るものである。口縁部は外面に1条の沈線がめぐり、内面に稜がみられる。内外面回転ナデが施される。(第35図1)



第31図 第1トレンチ 1:80

## 第2トレンチ

ここは（杭）23～（杭）27ラインの中間に位置する  
5.5×1.5mのトレンチである。  
土層は、表土下に第1ト

レンチ同様、明赤褐色土や  
黄褐色土が1.5～2.1mの厚  
さで堆積している。

トレンチの西壁から2.3  
mのところで黒褐色土が検  
出された。黒褐色土は東に  
向かって次第に下り傾斜し、  
東壁際で表土下2.1m、厚  
さ35cmを測る。さらに下層  
には褐色土が東に向かって  
次第に厚く堆積している。（第32図）

遺物は黒褐色土中や褐色土中から須恵器甕類など4点が出土した。（第35図2）

## 第3トレンチ

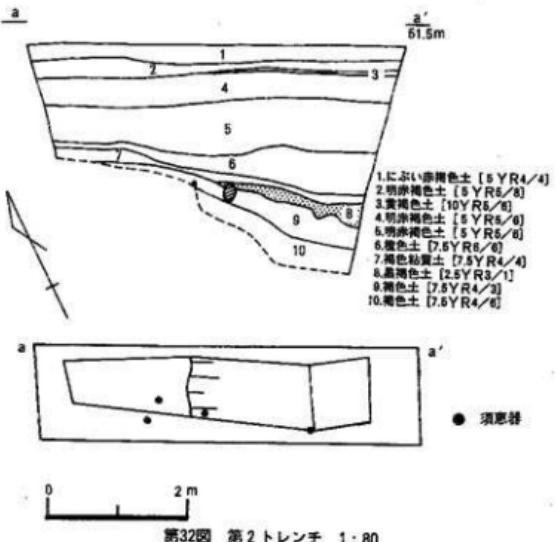
ここは（杭）19～（杭）21ラインに位置する20×1.5mのトレンチであるが、中程の5.5m間は掘り  
下げなかった。このトレンチは第4トレンチと同様に、谷部の横断面の堆積状況を探る目的で設定し  
たものである。

土層は、トレンチの東壁から5.2mまでは急斜面のため土砂の堆積は少ないが、ここから西へ  
向かっては、明赤褐色土や茶褐色土が次第に厚く堆積する。下層には黒褐色土がみられ、最も  
深いところで2.1mを測る。黒褐色土の下には粘性のある黄褐色土や赤褐色土が地形に沿って  
堆積している。（第33図）

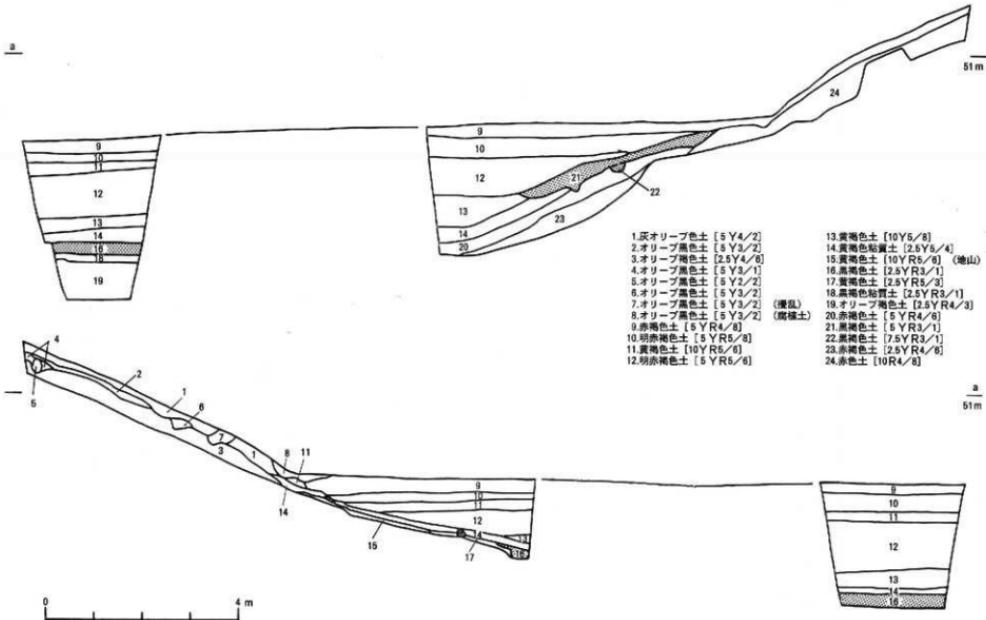
遺物は黒褐色土中から須恵器甕片が1点出土した。（第35図3）

## 第4トレンチ

ここは（杭）17～（杭）19ラインに位置する20×1.5mのトレンチであるが、中程の6m間は掘り  
下げなかった。



第32図 第2トレンチ 1:80



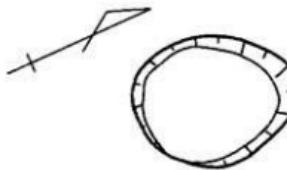
第33図 第3(上)、第4(下)トレンチ 1:80

上層は、トレンチの西壁から5.8mまでは急斜面のため土砂はあまり厚く堆積しないが、ここより東に向かっては明赤褐色土や黄褐色土が次第に厚く堆積している。黒褐色土は西壁から9.8m地点で検出され、最も深いところで2.6mを測る。(第33図)

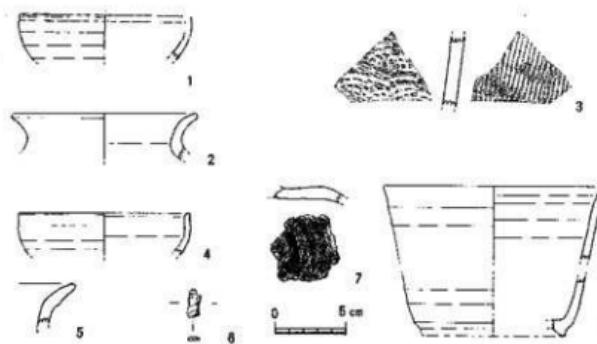
なお、トレンチの中程の斜面で、径50cm、深さ15cmの円形土坑が検出されたが、性格や時期等は不明である。(第34図)

遺物は黒褐色土中から須恵器6、土師器6、黒曜石1が出土した。

第35図4は須恵器の坏身で口径12cmを測る。体部は内渦気味に立ち上り、口縁部近くで浅い凹線をもつ。内外面回転ナデを施す。5は壺の口縁部で、外面に低い段がつく。6は黒曜石の剥片である。



第34図 第4トレンチ土塙 1:10



第35図 第1(1)、第2(2)、第3(3)、第4(4~6)、  
第6(7・8)トレンチ出土遺物 1:4

## 第5トレンチ

ここは(杭)9～(杭)19ラインに位置する13×1mのトレンチであるが、中程の1.5m間は掘り下げなかった。

土層は、表土下に明赤褐色土や黄褐色土が2.25～2.45mの厚さで厚く堆積している。その下に黒褐色土が全域で検出された。(第36図)

遺物は黒褐色土中から須恵器7、土師器6が出土した。

## 第6トレンチ

ここは(杭)9～(杭)14ラインに位置する6×1mのトレンチである。

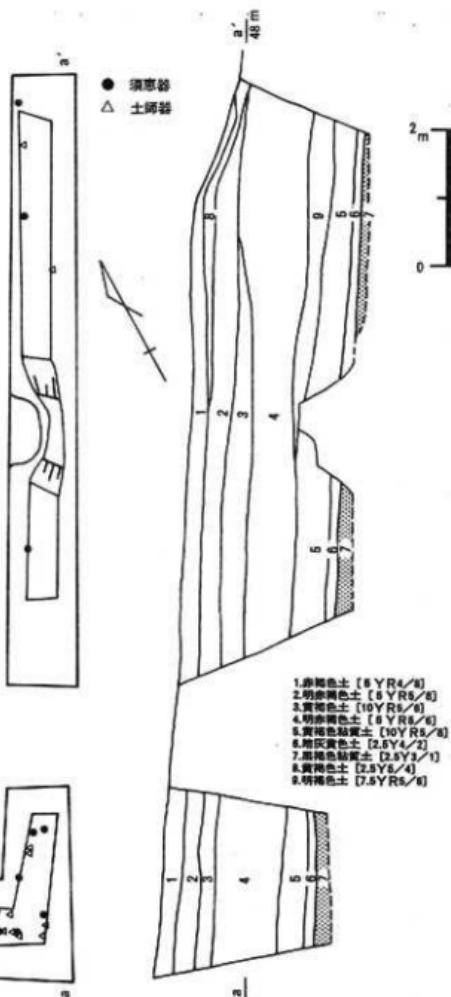
土層は、表土下に赤褐色土や明赤褐色土が1～1.7mの厚さで堆積し、その下に黒褐色土が検出された。黒褐色土は60cmの厚さでみられる。

(第37図)

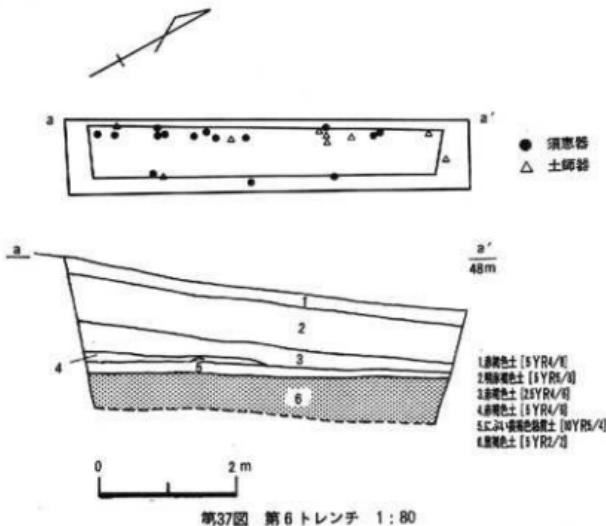
遺物は、黒褐色土中から多く出土し、須恵器15、土師器9がある。

第35図7は坏蓋の天井部である。天井部は平坦で外面にヘラ削り後ナデ調整、内面は回転ナデが施される。内面にX状のヘラ描きが認められる。

8は大形の高台付き環で、口径15.5cmを測る。高台は低いもので、坏部は長く斜め上方にのび、口縁端部は鋭り気味である。内外面に回転ナデが明瞭である。



第36図 第5トレンチ 1:80



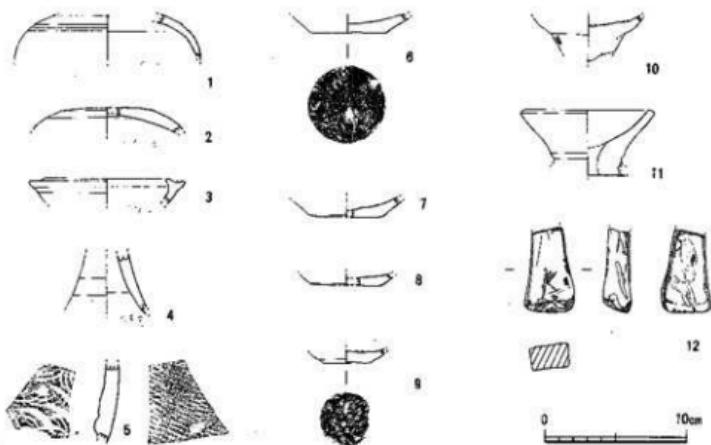
第7トレンチ

ここは（杭）7～（杭）6ラインに位置する $16 \times 1$ mのトレンチであるが、調査の過程で $3.5 \times 1.5$ mと $1 \times 1$ mの範囲で拡張して調査を行った。

土層は、表土下に明赤褐色土や赤褐色土が西に薄く $0.4$ m、東に厚く $2$ mの厚さで堆積している。その下に黒褐色土が $15 \sim 40$ cmの厚さで全域にみられ、さらに暗赤褐色土 $18$ cm、極暗赤褐色土 $20$ cm、オリーブ褐色土 $30$ cmが堆積している。（第39図）

オリーブ褐色土中に大小の河原石や山石などの礫が多く検出された。礫は径 $5$ cm程度の小礫から $70 \times 100$ cmの大形の礫までみられるが、これらに規則的な配列を見いだすことはできなかった。また、径 $20$ cm前後の小さなビットが $4$ 穴検出されたが、詳細は不明であった。

遺物は、黒褐色土層以下から須恵器や土師質土器が出土した。砥石も $1$ 点出土した。第38図 $1 \sim 5$ は須恵器である。1は壺蓋で口縁部と天井部との境は $2$ つの浅い沈線によって低い稜を作り出している。2も壺蓋で天井部外面にヘラ削りが残る。3は壺身で、口径 $8.6$ cmを測り、受部に低い立ち上りを有す。4は高壺脚部、5は壺の体部である。6～9は土師質土器の皿である。6～8は底径 $5$ cm程度の皿で、体部は直線的に斜め外方に開くものである。底部調整は不明である。9は底径 $3.3$ cmと小さいものである。底部には回転糸切りが残る。10は高壺の壺底と思われる。壺部と脚部との取り付けは円板充填による。11は低脚の壺ではないかと思われる。湾曲してのびる口縁端部は平らである。12は安山岩製の砥石である。長さ $5.8$ cm、幅 $2.2 \sim 3.5$ cm、厚さ $1.6$ cmを測る。



第39図 第7トレンチ出土遺物 1:4

小結

以上、文献や地名、地形から想定して、その存在を確認するために本推定地の調査を行った。

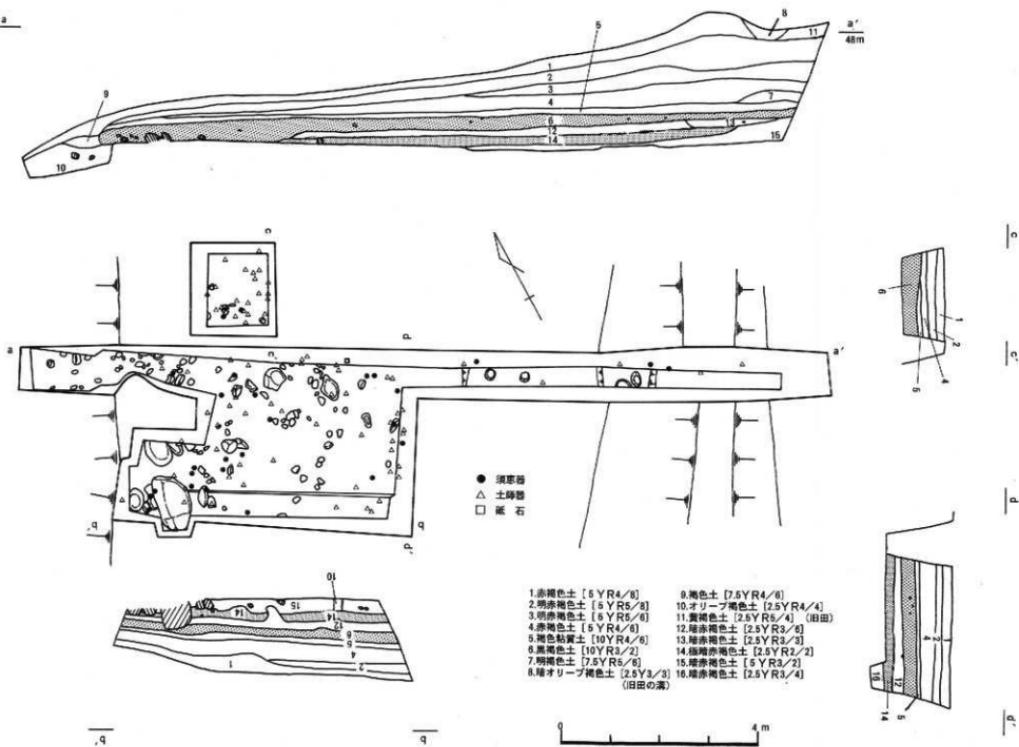
調査の結果、土層については、予想外に多量の土砂が堆積していたものの、表土下1.5～3mの深さで黒褐色土が全トレンチから確認されたので、旧表土面が谷全域に広がっていることがわかった。

遺構については、第7トレーニングで、大小の礫や小ビットが検出された。また、第4トレーニングの斜面では、土塊が検出されたがいづれも陶器、性格等は不明であった。

出土遺物についてみると、第7トレンチからは、須恵器の环蓋、环身、斐等、土師質土器皿等が出土した。須恵器の环身は山本須恵器編年IV期の特徴をもち、土師質土器の皿は12~13世紀代に属するものであろう。その他のトレンチで時期のわかる遺物としては、第1トレンチ出土の环身、第4トレンチ出土の环身、第6トレンチ出土の环蓋、高台付き环がある。いずれも山本須恵器編年IV期以降でも新しい時期のものであろう。

このように、若干の遺物が出土したものの明確な遺構は確認できず、当初想定していた郡家に関するものを見い出すことができなかった。しかし、遺物の分布状況から、何らかの遺構が谷全域に広がっていることが十分に考えられよう。

出雲郡家の所在地は、『出雲國風土記參究』（加藤義成著）によれば、「求院と出西との中間」に想定されている。しかし、考古学的には何ら確証がないため、定説がないのが現状である。今回は『考』に記された「出雲鄉即屬郡家」条をもとに「長者原」の地を想定して調査を行ったが、所在地論に迫るために今後の面的な調査を待たねばならないであろう。



第39図 第7トレンチ 1:80

#### 4. 小丸子山古墳

本古墳は、高瀬山から北へ派生する丘陵の東側縁辺部に立地する町内最大の円墳である。付近は神庭古墳群、田中古墳群、上学頭古墳群など数多くの中小規模の古墳が群集している地域である。（第40図）

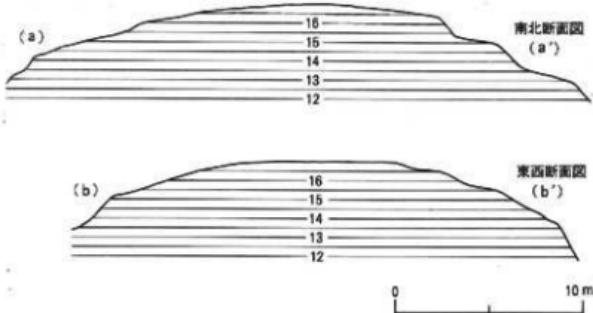
今回の墳丘測量の結果、古墳の規模は径32m、高さ5.3mを測るが、この数字はあくまでも、現存径と現存高を示すものである。墳頂が後世の削平により、崖状になっていることから、築造当初はもう少し大きな規模を誇っていたものと考えられる。なお、墳頂部の標高は17.070mを測る。



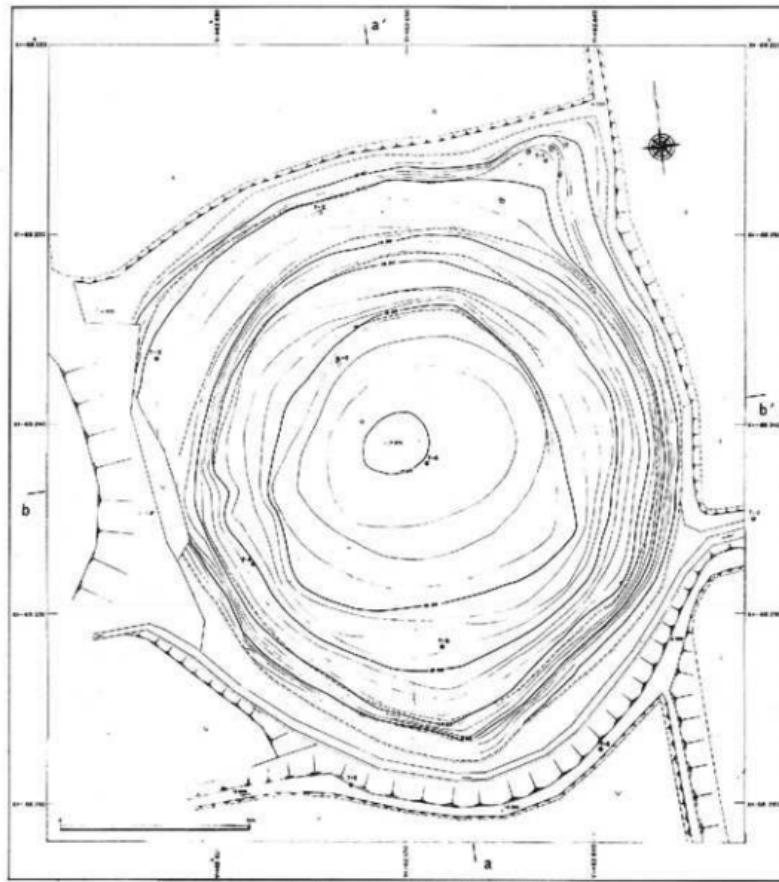
第40図 小丸子山古墳の位置

墳丘はコンターや断面図にみられるとおり、墳頂部に径10mの範囲で平坦部が認められる。また、墳丘の北側斜面では幅2~2.5mの平坦部が2段にわたって半周するが、南側は平坦部が続かない。地元の人の話によると、墳頂部や斜面は以前、畑に利用されたことがあるということである。従って、この平坦部は後世の削平によるものと判断できよう。しかし、断面図を良くみると、南側や西側、東側斜面は標高15~16m前後にわざかな平坦部が認められる。正式な発掘調査を行わなければわからないが、二段築成の可能性を窺わせるものである。（第41・42図）

（註）  
なお、埋葬施設については、「出雲考古学会報」第3号（昭和23年）に発掘の聞き書きが載せてある。それによると、①明治42年ごろ、土地の人々によって発掘が行われた。この時に、②小石を敷き詰めた埋葬施設が2ヶ所発見された。③発掘品には直刀2振、カブト、祝部式土器、毛髪少々がある。以上が当時の発掘成果であるが、遺物は現在埋め戻されているとのことである。



第41図 小丸子山古墳墳丘断面図 1:300



第42図 小丸子山古墳墳丘測量図 1:300

## 5. 外ヶ市古墳

広大な簸川平野の南は仏経山を始めとする300m級の山並みが連なり、その北麓には古墳時代中～後期の古墳群が数多く存在する。外ヶ市古墳もそのうちの一つで、標高19mを測る丘陵先端部に立地する山寄せの古墳である。（第43図）

墳丘は中央部を幅1mの山道が貫き、北側が3mの段差をもって大幅な削平をうけていることから、旧状は完全に損われている。ただ、山道の南側で高さ4m、幅7mの範囲で斜面がカットされているので、古墳の南端の範囲をわずかに掘むことができる。

石室は古くから露出し、天井石は無く、S～40°～Wとほぼ南南西に開口している。今回は玄室を中心とした調査を行った。調査開始直後に右側壁寄りの表土近くから、須恵器环身が1片出土した。また開口している玄室内部の土砂を取り除いた際に、唐津すり鉢、伊万里碗などの陶磁器、五輪塔3体、天神様、鉄製刀と鉗が多数の礫とともに出土したが、古墳とは関係のない時期ものである。

調査の結果、当初から露出している玄室の奥壁や左右側壁のほかに、底石も残存し、片袖式であることも新たにわかった。石材は奥壁、左右側壁、袖石が黒っぽい安山岩質岩石で共通しているのに対して、底石だけは地元で出西石と呼ぶ青味のある軟質な凝灰岩を使用していることは、興味深い事実である。

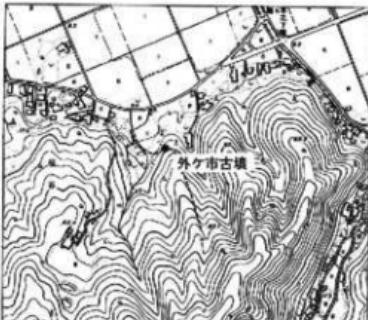
玄室の規模は奥行き2.2m、幅0.8mを測る継長プランを呈し、天井石は無いものの高さは1.4m位になるものと思われる。（第45図）

奥壁は高さ1.4m、横幅は上端で0.9m、厚さ0.5mの一枚石で構成されている。

左右の側壁は、北側が崖のため傾いた状態である。左側壁は高さ1m、横幅2.2mの長方形の石材を基部に据え、その上にやや小型の割石を横積みしている。基部の石の内面を平らに加工したノミ痕が認められる。右側壁は左側壁とは石材の積み方が対照的である。まず高さ40～60cm、幅50cmの石材を3個用いて腰石とし、その上に長さ30～60cm、幅40cmの割石を2～3段に積み重ねている。しかし、側壁が全体に傾いているせもあり、この積み方にあまり規則性は認められず、これがただちに築造当初からのようすをとどめているとは見なし難い。ただ、大きな腰石の上に割石を数段積み上げる手法は、平田市小谷下古墳や口字賀古墳などに類例が求められよう。<sup>(37)</sup>

また、先述した左側壁のように大小の石材を段積みにする手法は、町内に存在する出西小丸古墳や武部西古墳に共通してみられるものである。なお、側壁の石材構成が左右で異なる例は平田市伊儀上古墳や定岡谷古墳群でも幾つか見受けられるようである。

玄室の底石は長さ40～50cm、幅25cmの長方形の割石を縦7枚、横2列に上面が平坦になるように敷



第43図 外ヶ市古墳の位置

いている。袖石は左側壁の角に立てられ、その上には眉石が乗っていたものと考えられるが現存しない。

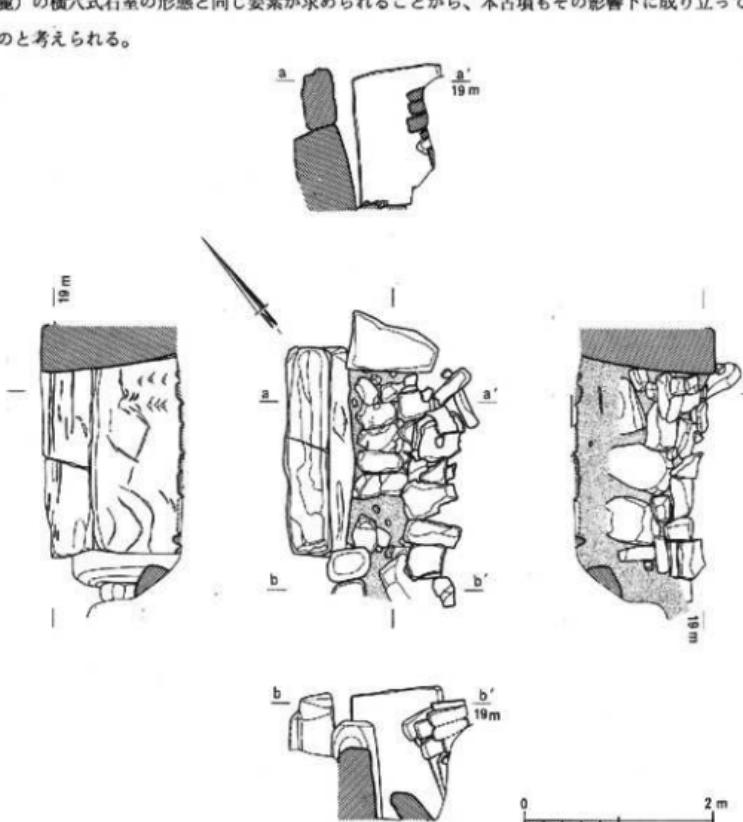
羨道については未調査であるが、袖石に沿って羨道の基底となる石が1つ確認されている。

遺物は先に記した須恵器の环身が唯一のもので、山本須恵器編年IV期に含まれるものである。(第44図)

以上のように、本古墳の玄室構造は、縦長プランの片袖式で、奥壁は一枚石で構成されるものの、側壁は左右によって異なるという特徴を示している。このような特徴は周辺地域(仏経山周辺や北山山麓)の横穴式石室の形態と同じ要素が求められることから、本古墳もその影響下に成立しているものと考えられる。



第44図 外ヶ市古墳出土遺物 1:3



第45図 外ヶ市古墳玄室測量図 1:300

### III. おわりに

荒神谷遺跡の発掘調査は、事前に分布調査を行った際に1片の須恵器が水田畦から採集されたため実施された。究極すれば、1片の土器採集が358本の銅剣発見のきっかけになったといえよう。これは分布調査の重要性を再認識させられた好例である。

分布調査とは表面からの観察や遺物の採集、ボーリングや最新鋭機器による探査などの方法を用いて、いわば外部から遺跡のあり方をとらえる方法である。また、土器や石器などの遺物は人の介在なしでは存在しないのであるから、遺物の存在は遺跡そのものと考えている。遺跡の発見は、まず詳細な分布調査を行うことが基本である。

そういった意味で、本町では平成元年度から、3ヶ年かけて分布調査を実施して、新たに22遺跡が確認された。これによって、町内の遺跡の総数は平成4年3月現在で、ちょうど200遺跡となった。内訳は下記のとおりである。ただ、今回も町全域をくまなく踏査できたわけではないので、まだまだ多くの未発見遺跡が存在することは確実である。今後も引き続き分布調査を行なう考えである。

古墳（群）・横穴（群）	.....	80
散布地・住居跡	.....	94
城跡・館跡関係	.....	16
寺院関係	.....	2
墓跡	.....	3
その他	.....	5
	計	200

- 註(1) 斐川町教育委員会『斐川町史』1972  
(2) 島根県教育委員会『島根県遺跡地図Ⅰ』(出雲・隱岐編) 1987  
(3) 註(1)と同書  
(4) 片岡詩子「島根県『旧石器文化』事情」『八雲立つ風土記の丘』No.105 島根県立八雲立  
つ風土記の丘 1991  
(5) 島根県教育委員会『荒神谷遺跡銅剣発掘調査概報』1985  
同『荒神谷遺跡発掘調査概報(2) 銅鐸・銅矛山土地』1986  
(6) 斐川町教育委員会『西谷遺跡緊急発掘調査報告書』1988

- (7) 註(1)と同書
- (8) 宍道年弘 「結1号墳出土の蛇行状鉄劍」「八雲立つ風土記の丘」No.73 島根県立八雲立つ風土記の丘 1985
- (9) 宍道町教育委員会 「宍道町埋蔵文化財調査報告書2」 1980
- (10) 斐川町教育委員会 「平野横穴墓群発掘調査報告書」 1984
- (11) 加藤義成 「出雲国風土記参究」 松江今井書店 1957
- (12) 斐川町教育委員会 「天寺平廃寺について」「八雲立つ風土記の丘」No.84 島根県立八雲立つ風土記の丘 1987
- (13) 註(1)と同書
- (14) 斐川町教育委員会 「大井城跡発掘調査報告書」 1983
- (15) 池田敏雄 「斐川の地名散歩」 斐川町役場 1987
- (16) 山本 清 「山陰の須恵器」「山陰古墳文化の研究」 1971
- (17) 註(15)と同書
- (18) 広瀬町文化財専門委員藤原久良氏のご教示による。
- (19) 奈良県立橿原考古学研究所 「六条山遺跡」 1980
- (20) 寺村光晴 「古代玉作の研究」 吉川弘文館 1966
- (21) 松江市教育委員会 「堤廻遺跡」 1986
- (22) 島根県教育委員会 「高広遺跡発掘調査報告書」 1984
- (23) 出雲市教育委員会松山智文氏のご教示による。島根県教育委員会 「島根県生産遺跡分布調査報告書IV」 1987
- (24) 横山永福 「出雲風土記考」 島根県皇典講究分所 1920
- (25) 註(15)と同書
- (26) 池田満雄氏のご好意により「出雲考古学会報」を拝読する機会を得、小丸子山古墳についても種々ご教示いただいた。
- (27) 佐藤雄史 「島根半島における横穴式石室の様相」「島根考古学会誌」第7集 島根考古学会 1990、島根大学考古学研究会 「菅田考古」第14号 1976
- (28) 出雲考古学研究会 「石棺式石室の研究」 1987

## 特 別 喜 稿

### 斐川町大倉IV遺跡出土のいわゆる碧玉について

鳥根大学教育学部教授

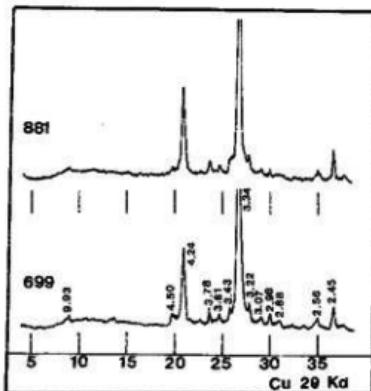
三 浦 清

#### 1. まえがき

斐川町大倉IV遺跡から、いわゆる碧玉の破片が出土した。そのうちの二点（試料番号：699, 881）についてEPMA分析およびX線回折実験を実施し、若干の知見を得たので報告する。

#### 2. X線回折実験

試料を粉碎し、実験に供した。二試料とも4.50 Å、3.34 Åに強いピークを示し、鉱物学上、殆んど石英を主とするものであることを示す。微量成分としてはセラドナイト様粘土鉱物、長石などが含まれる。これらの結果はいわゆる碧玉が示すX線回折パターンと同じものである。図-1はそのX線回折図である。



第1図 大倉IV遺跡出土碧玉のX線回折図

#### 3. 化学組成

EPMA分析法により、均質部分の化学組成を求めた。その結果は図-2に示すとおりである。試料699は881に比してSiO<sub>2</sub>成分がやや少いが両者は連続したAl<sub>2</sub>O<sub>3</sub>、K<sub>2</sub>O、FeO、MgO、Na<sub>2</sub>O、CaO含量を示し、同じ産地のものと見てよかろう。

今、三浦ら（1988）が研究した玉湯町花仙山産の碧玉の分析値（図-3）とこれを比較すると次のような差が認められる。

- (1) SiO<sub>2</sub>含量の範囲が類似している。
- (2) Al<sub>2</sub>O<sub>3</sub>含量については花仙山産のものよりやや多い。
- (3) K<sub>2</sub>O含量については花仙山産のものより、やや多い。
- (4) FeO含量については類似するが、K<sub>2</sub>OとFeO含量が明確に分離する。
- (5) MgO含量については花仙山産のものよりやや少い。

(6)  $\text{Na}_2\text{O}$ 、 $\text{CaO}$ 含量は両者において類似する。

以上のように、大倉IV遺跡出土の碧玉の化学組成は、花仙山産のものと比較して微妙な差がある。

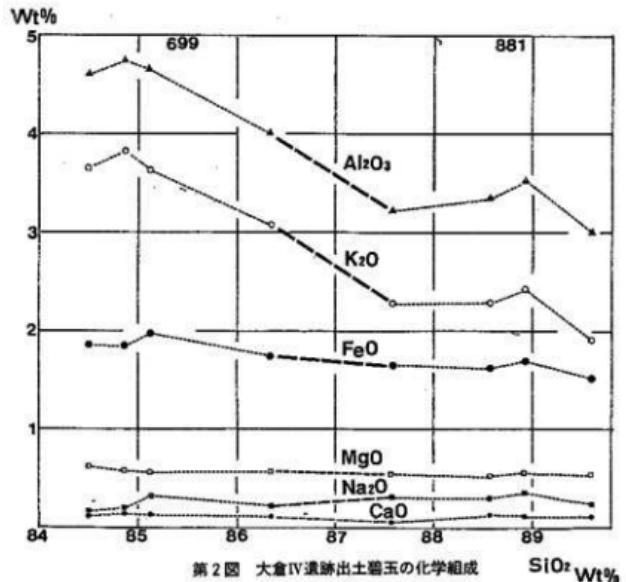
これと極めて似た碧玉の原石は三浦ら(1989)が示した西川津遺跡から一点だけ確認される。それは図-4に示すものである。また、類似したものが図-5に示す如く、平所遺跡からも発見されている。

以上のように大倉IV遺跡出土の碧玉破片は花仙山産のものと異なる一つのタイプとして確認される。

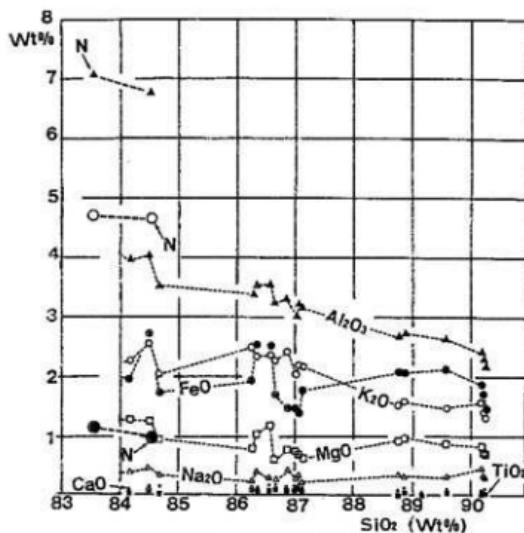
このほか、この近在の遺跡から、例えば、三浦ら(1988)が西谷遺跡出土の碧玉で示した図-6のよう $\text{K}_2\text{O}$ 、 $\text{Al}_2\text{O}_3$ の極めて高含量のものがある。西川津遺跡出土の碧玉も大多数はこの種のものである。

#### 4. おわりに

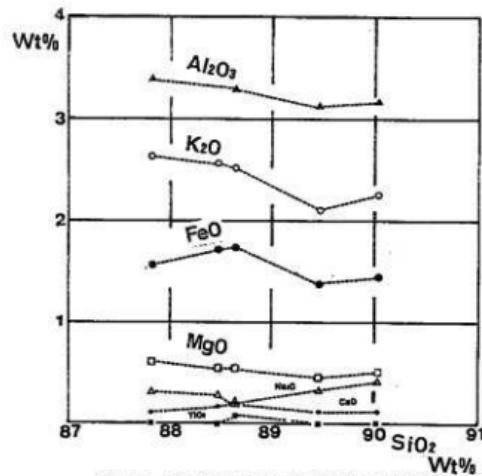
以上のように、大倉IV遺跡出土の碧玉原石は花仙山産のものとはやや異なるもので、同種の見られるものが西川津や平所からも発見されている。また、これは $\text{K}_2\text{O}$ 、 $\text{Al}_2\text{O}_3$ の特に高含量を示すものとも異なり、明らかにこの周辺から出土した碧玉の一つの特徴的なタイプである。しかしながら、その原産地については現在のところ明らかにしない。



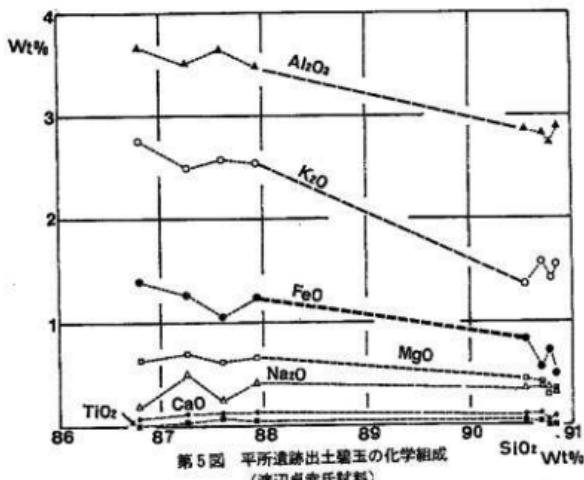
第2図 大倉IV遺跡出土碧玉の化学組成



第3図 花仙山産玉の化学組成  
N: 比較のために西谷遺跡出土の碧玉製管玉を  
同じ図に示したもの（非破壊分析）



第4図 西川津遺跡出土原石（123）の化学組成



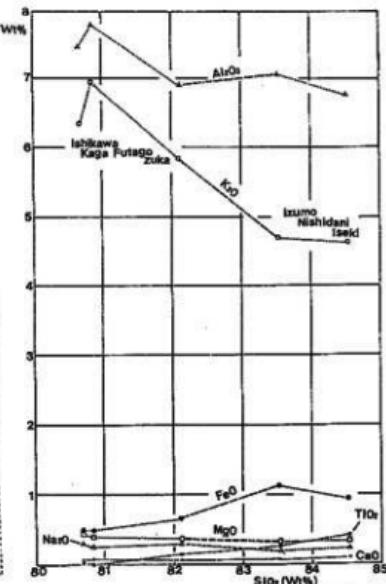
第5図 平所遺跡出土碧玉の化学組成  
(渡辺貞幸氏資料)

### 文 献

三浦 清・渡辺貞幸(1988)：島根県玉湯町花仙山產碧玉の性質—遺跡から出土する碧玉の原産地同定をめぐって—，島根大学教育学部紀要(人文・社会科学編)，第22巻-第2号，27-31。

三浦 清・渡辺貞幸(1988)：山陰地方における弥生墳丘墓出土の玉材について—西谷3号墓出土品を中心にして—，島根考古学会誌，第5集，45-63。

三浦 清・内田伸雄・渡辺貞幸(1989)：松江市西川津遺跡弥生層準から出土した碧玉について，島根大学山陰地域研究総合センター山陰地域研究(伝統文化)，第5号，17-24。



第6図 石川県加賀二子塚出土の碧玉原石および出雲市西谷遺跡出土の碧玉製管玉(非破壊分析)の化学組成

# 出雲郡家の所在地考

斐川町文化財保護審議会委員

池田敏雄

## はじめに

「出雲國風土記」に記されている出雲國出雲郡の「郡家」の所在地については、岸崎左久次時照「出雲風土記抄」（1683年）以降諸説があるが、いまだその定説は確立していない。

それは、その推定地が斐伊川下流のかつての氾濫原に相当し、標高12~14mに達する沖積地であることから、その遺跡の調査が至難であることに起因する。ために風土記記載の郡家と郡境、郷庁、山、川等との道度、方位をよりどころにして郡家の位置を求めて推論せざるを得ない。

しかしながら、往時の地形、河流、郡、郷域等が先哲の論考時と必ずしも一致しないこと、道度の里程、方位の測定の不確さ等から、出雲郡家の位置の特定に関する過去の諸論考は、それぞれが幾ばくかの疑問を孕んでいるといえる。

そこで、古来からの地名伝承、斐伊川と出雲平野とのかかわり、郡、郷の境域、道度の里程、等について再調査し、再検討することによって、出雲郡家の位置についての仮説を求めるといふ。

このたび、斐川町教育委員会は、その仮説としてとりあげた、郡家の所在地とおぼしき町内出西区「稻城」の一角に位置する「長者原」の一部分を発掘調査した。

その結果については調査報告の通りであるが、出雲郡家の位置については、この長者原丘陵の麓に拡がる「稻城の平坦地」であるように思われる。

## 出雲郡家の所在地に関する論考

### 1. これまでの論考を簡略してあげると次の通りである。

書名	著・編者	比定場所	論拠
出雲風土記抄 (1683)	岸崎時照	山西と求院の中間	断定
出雲風土記解 (1787)	内山真龍	山西と求院の中間	抄を紹介
出雲風土記考 (1863)	横山永福	長者原	長者原の地名
出雲風土記 (1920)	島根縣阜典講究分所	長者原	考を紹介
出雲國風土記考證 (1926)	後藤嘉四郎	求院八幡の東四丁	道度の里程
出雲國風土記参究 (1957)	加藤義成	富村(求院に近い辺り)	道度の里程

## 2. 諸説の論考概要

### ① 岸崎説

特に論拠を示していないが、郡内の出雲大川、神名火山、郡境、郷庁などからの適度を参考に郡家の位置を帰納的に求めて「出西と求院の中間」としたのであろう。

この場合の里程は、風土記の1里を後世の約6町で論じているので問題があるが、それをもとにし里程を算出すると、郡家—出雲大川（西へ2里20歩=約1,418m）、郡家—漆沼郷（正東5里270歩=約3,763m）、郡家—神名火山（東南3里150歩=約2,236m）、郡家—美談郷（正北9里24歩=約5,934m）、郡家—神戸里（西北2里120歩=約1,527m）となる（近距離のみとする）

これを地図上（1万分の1）で測定してみると、郡家の位置は出西旧飛行場滑走路の西部に相当するが、漆沼郷、美談郷、神戸里とは距離が過長であり、位置的にみて平安中期以降の筑業街道を想定して郡家を比定したかのようである。

### ② 横山説

風土記考は5町を1里としている。それによって換算すると、郡家より出雲大川まで1,176m、漆沼郷3,154m、神名火山1,871m、美談郷5,238m、神戸里1,283mとなる。（以降の諸説論考は、5町を1里としているので、重複をさけるため、上記以外の里程の場合のみ記することにする）

横山は郡家を「長者原」に比定しているが、出雲大川との距離に大きな隔たりがあり、神戸里とも若干の隔たりがある。しかし総じてやゝ妥当な比定場所といえそうである。（出雲大川との距離については後述）

しかしながら、この説の論拠と思われるものは、考に「出西村の内東方新川より間近き小山の下に今里人の長者原という所あり是処なるべく思われる」とあって、長者原地名伝承によっているので、郡家と他との里程から導き出された比定位置とはいえないように考えられる。

### ③ 後藤説

考證によれば、「郡家から出雲大河の東岸へ古の2里60歩、神名火山へは東南3里150歩、伊勢郷へは正北8里72歩、左雜の堺へ13里64歩、これ等によって推せば、求院の八幡社より東4丁許りの處であったろう」としている。

これは郡家の基点として、方角、距離を記し、郡家の位置をそれらから逆推して求めている。

したがって比定されている位置から出雲大川までの距離については妥当かと思われるが、神名火山までの距離が過短で、神戸里へは過長であり位置としては疑わしい。佐雜も合致しない。

八幡社の東辺は、江戸時代（戦国時代？）に石州街道が東西に通じていた。明治以降は山川街道と変名したが、郡家の所在地をその要路を参考として求めたのかもしれない。

### ④ 加藤説

参究によると「郡家は幡縫郡界から7.875km、佐雜堺から7.063km、大原郡界から8.086km出雲

大川の河端へ1.175km の所であったことになるから、斐川町富村の求院に近い辺りにあったと思われる」としている。

過去の多くの論考と同様に、出雲大川を基点として東への距離から郡家の位置を求めており、ここを郡家の所在地とすれば、神名火山までの里程が過短で、神戸里は構辺であるのにその距離が過長である。佐維埼も合致しない。

この位置も旧石州街道の要路に近かったので参考とされたのかもしれない。

## 諸論考に関しての所見

### 1. 出雲大川の流路と郡家

斐伊川の流路が西流から東流に改川されたのは寛永年間といわれているが、それ以降斐伊川の流路は下流部を除いてはほぼ現状の通りである。

しかしながらそれ以前、とりわけ風上記記載時の西流が、山間部から平野部への流出口（斐川町岩橋・山雲市船津町上行の間）から川の曲折地に相当する武志町までの間（中流部）、東流改川以降の流路位置と同一の流路であったとは考えられない。

中世以前の斐伊川は土砂の流出が少く、洪水氾濫時は、山間部では山肌に激突蛇行して流出し、平野部では山麓流出口の地形に左右された流路となる（自然河川）

ちなみに流出口の地形をみると、左岸の船津町上行地区に北方へ突出した山がある。洪水時にはその水流が、出西伊保の山肌に当たった後、反動的に対岸の上げの山肌に激突すれば、その主流は放物線状に対岸に変じ、中出西、下出西西部の山麓平坦地を北東に流れることになり、その下流が東流又は北流することができる。

土砂の流出が少ない河川は、洪水時の主流跡が河川となる可能性が強い。したがって風上記記載時の頃の中流部は、前述の如く北東流し、その後、北流して武志まで至ったものであろう。このように想定すると、中流部の流路位置は西流時と東流以降とは異なることとなり、具体的には現況より東方（約300～500m）に自然河川の流路をもつ出雲大川があったと考えられる。

なお、斐伊川東流改川以前にあったという式内社が、改川により川中となるため移転させられたこと。鉄橋補修時川床約7m下から弥生式土器が出土したこと等、この論拠の一つともなる。

以上のことから「抄」「解」「考證」「參究」を考察すると、すべて斐伊川東流以降（ほぼ現況）の流路位置を基点とする距離をもって郡家の所在地を特定しているので、妥当性に疑問があるといえる。

今一つ指摘したいのは、洪水時には沖積平野である平坦地は氾濫原となることである。斐伊川の洪水記録は16世紀以降が残されているが、往古に洪水がなかったとはいえない。もっとも中世以降は砂鉄によるたら製鉄による土砂の流出の激増によって斐伊川が天井川となり、ために洪水被害が大

であったことは、中世以前と比較できないほどであったことはうなづける。

しかし、中国山脈に源を発し、幾条かの枝川を併合して神門水海に注ぐ出雲大川は大河である。南山麓の流出口（前述）とりわけ船津上げの山の突端部に激突した水は現斐伊川東部を直撃して、その地域を氾濫原にしてしまう。堤防のない無防備の往時にあっては、いたしかたない状況にあったといえよう。したがって降雨の都度、氾濫流出におびえる悪条件の地に、重要な郡の官衛を置いたとは考えられない。

以上のことから出雲郡家の所在地は、もっと条件の整った他の地であったと考えられる。

## 2. 通 道

諸論考ともに風上記記載の正西道の経路位置については明確にされていない。にもかかわらず道度を用いて郡家の位置を特定しているのは不可解といわざるを得ない。

出雲郡家の場合、郡家から17か所の里程が記されているが、郡家の所在地を特定する場合、最も重要なのは正西道の経路であろう。

斐川町内の山麓部には地名伝承として、「大昔からの道」「筑紫への道」「石州への道」「山口への道」という通道名が残っている。そして、その通道と思われる経路は、時代が進むにつれて山地から山麓、そして平坦地へと移動している。

「大昔の道」と伝えられてきた道の痕跡は乏しいが、伝承経路上には長短の距離があるにしても風土記記載のお社が11社もあり、加えて、駅馬にかかると思われる馬名をもつ地名が6か所もある。実地踏査の結果「大昔の道」こそ正西道であると推考した。

斐川町内での筑紫街道は平安中期以降、石州街道は江戸期、山口街道は江戸末期から明治初期の通道であった。

以上の立場から諸論考をみると、「抄」「解」は筑紫街道を正西道跡と解して、郡家の所在地を求めており、「考證」「參究」は石州街道・山口街道を正西道跡と解して郡家の位置を求めていると推察される。このように推論すると、そのいずれもが妥当性を欠くことになる。

古代の往来、輸送は河川と馬によったといわれているが、湿地帯を南北に有する平坦地を馬によって東西に横断することは、不便であり、危険である。それよりも路の高低曲折はあるにしても南部山地、山麓の道の往来が安全である。

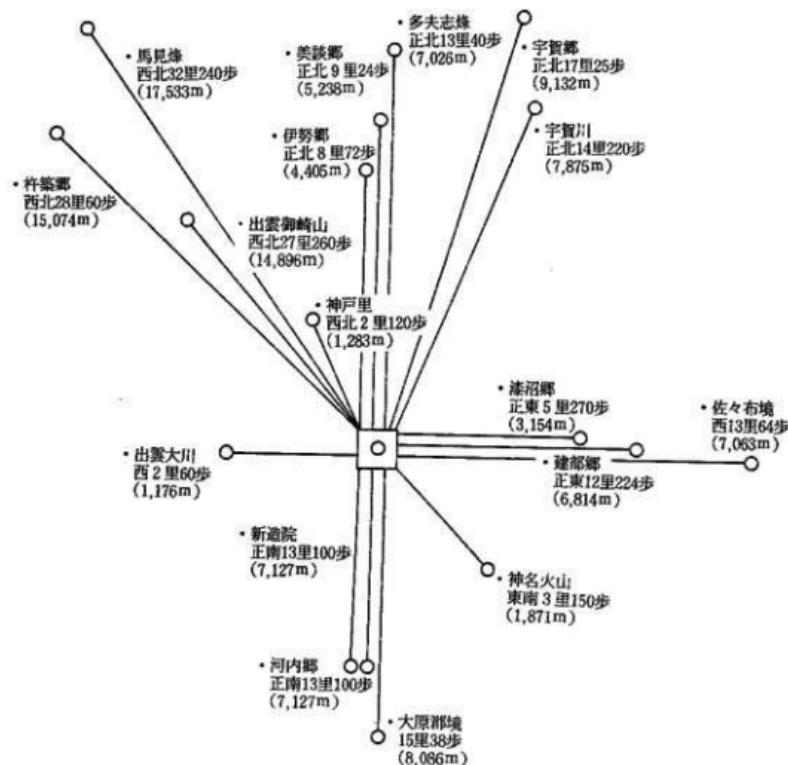
正西道は出雲郡の南部山地、山麓を通り出雲大川を経て、神門部の来原に至ったものと考えられるので、出雲郡家はその路線上に求めることが妥当のようである。

## 出雲郡家の所在地（仮説）

郡家は「出西と求院の中間」「八幡社の東四丁」「富村の求院近く」に所在した、とする諸論考について、出雲大川中流部の流部位置の古今の相違、氾濫原としての不安定性、通道、里程等から、そ

の妥当性を検討した結果、郡家の所在地は、それら幾多の不合性のない位置、つまり南部山麓の出西「福城」に比定したいと思う。

次図は、風土記載の度道を出雲郡家を核として求めたのである。



(上図は出雲国風土記参究によったものである。)

郡家の所在地を「稻城」とした場合を想定して、その近隣の道度（確実性が高い）を1万分の1の地図によって測定（現地の地形を勘案）を試みると、

- ・出雲大川が流出口から東流し、中出西、下山西の中間から北流したことを前提とすれば、郡家からの方位、里程は合致する。
- ・神名火山への里程は山麓の登山口までの距離であるとして求められるが、水室の寺谷か和西谷のいずれが登山口であったかは不明である。しかしそのいずれであったとしても山にかかる谷奥までの方位、甲程は妥当である。
- ・漆沼郷の郷庁について参究では、筑紫街道の経路がある貴船とされているが、正西道はそれより南方1kmの地と想定され、その路跡に「せきばば」という地名が残っており、郷庁とかかわりがあったと思われる。この想定に基いて測定すると里程も合致する。
- ・神戸里の郷庁について参究では、名島の南としているが、千家の客神社の辺りに相当すると思われる。客神社の辺りは伝承によると、本牛智和氣の御子が出雲人社参拝の帰りに言葉を発せられた仮宮（古事記垂仁天皇条）があった地といわれている。しかもその辺は小高い地であったといわれているので郷庁があったと想定される。稻城を郡家として測定すると妥当な距離である。
- ・伊勢郷、美談郷は、斐伊川東流前は斐川町の島井、今在家を郷域としていた。参究では、伊勢郷は東木材の山辺、美談郷は東谷辺としているが、いずれも郷域からみれば片寄った地であつて不便のそしりはまぬがれない。島井の斐伊川沿の地に「古役所」という地名が伝承され、現に屋号とした家があるが、その辺りが伊勢郷であったところと考えられる。また、美談郷の中央部に相当する地に「上！」の名がみられるが、この地の古名は、三倉家（さんぞうや）といい、古代には倉があって、ここから川舟を使って国庁まで米を運んだ、という伝承がある。これも郷庁と関連ある地名と考えられる。

そして、この二郷についても、それぞれ想定した郷庁との甲程をみると郡家「稻城」とした場合合致する。

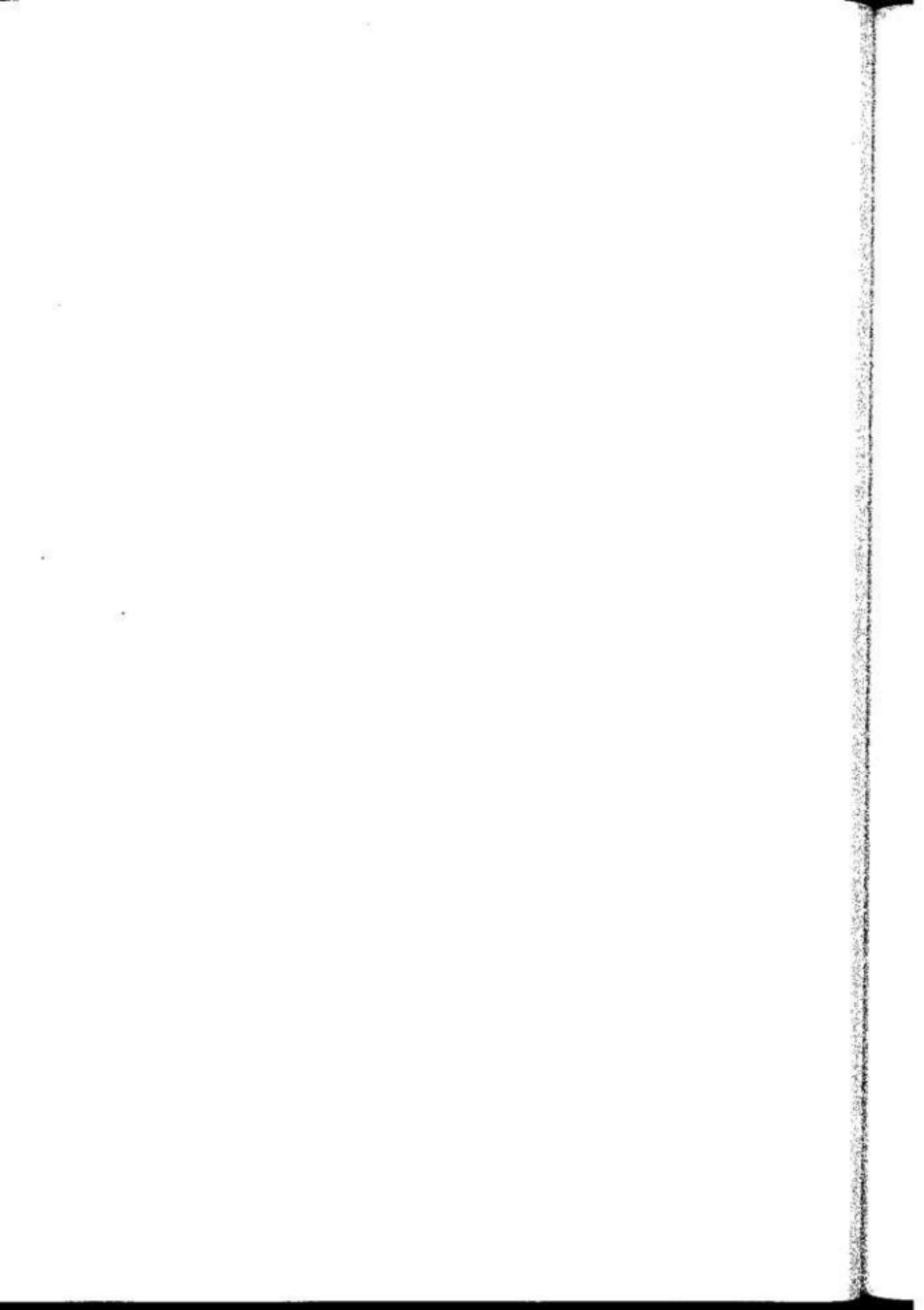
## むすび

以上、考察可能と思われる側面から推論して、出雲郡家の所在地を「稻城」と仮説をたてたが、過信、独断のそしりは免れない。

出雲國風上記考に、郡家は長者原とあり、その長官を加美という、とある。この長者原は、古代稻城の森の一角にあったといわれ、地名が現存している。郡家長者原説は評価できるが、やゝ不便な丘陵地にあることから、その山麓前面に拡がる微高地（風上記時）の稻城が妥当のように思われる。

（稻城に関する神話伝承もあるが割合する）

# 図版





斐川町航空写真 (昭和61年8月撮影、ワールド航測コンサルタント作成による合成写真)

図版 2



欠ノ元 1号墳



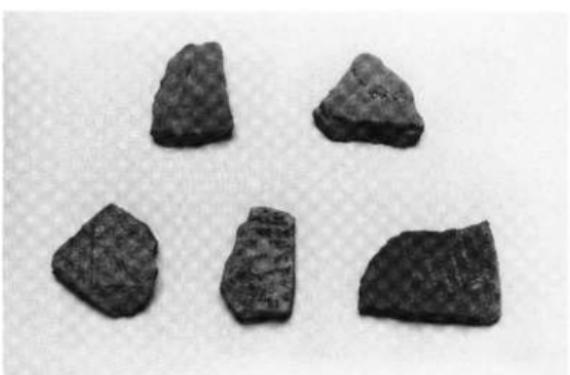
大倉城跡



宇屋谷城跡



宇屋谷 II 遺跡



宇屋谷 II 遺跡表探遺物

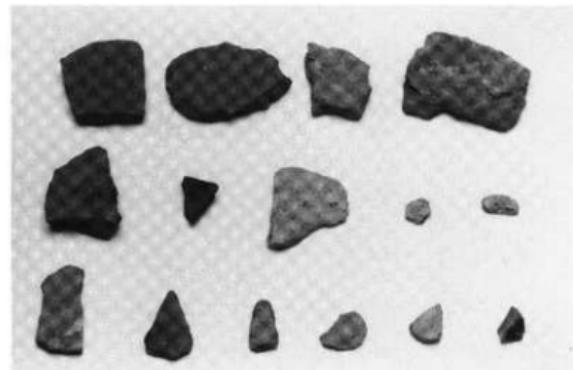


神庭谷 III 遺跡

図版 4



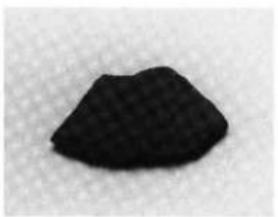
神庭谷Ⅲ遺跡表探遺物(1)



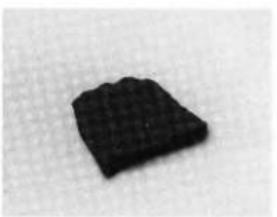
神庭谷Ⅲ遺跡表探遺物(2)



尾田瀬Ⅱ遺跡



尾田瀬II遺跡表採遺物

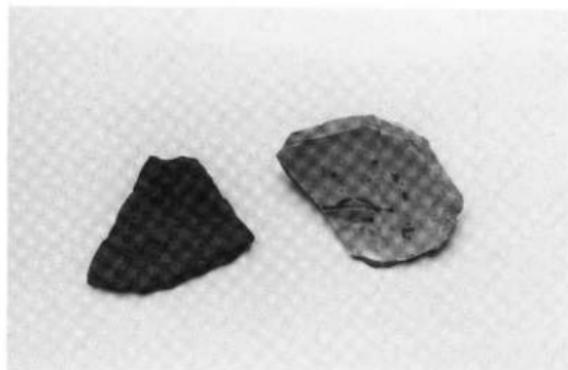


三格VII遺跡表採遺物



三格IX遺跡

図版 6



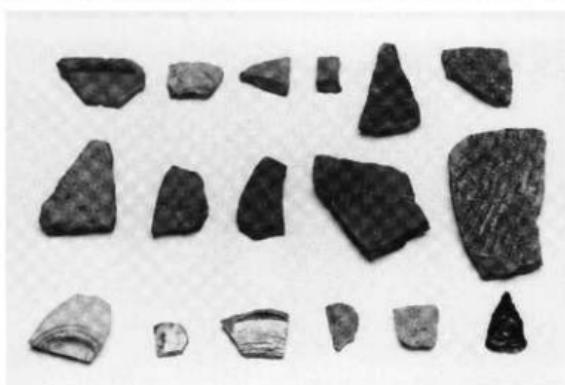
三格IX遺跡表探遺物



奥遺跡



奥遺跡表探遺物



図版 8



三経 XI 遺跡



三経 XI 遺跡表探遺物



紙園原遺跡

紙園原遺跡表探遺物



結本谷Ⅲ遺跡



結本谷Ⅲ遺跡表探遺物



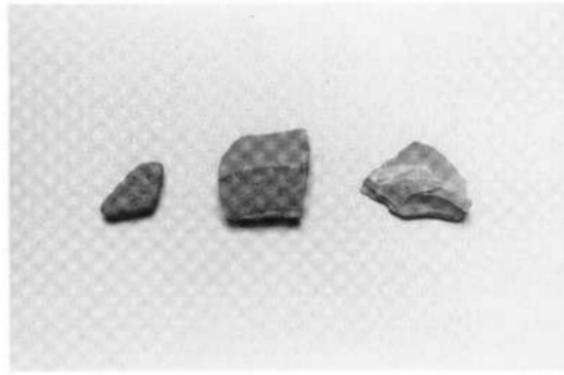
圖版 10



結城跡



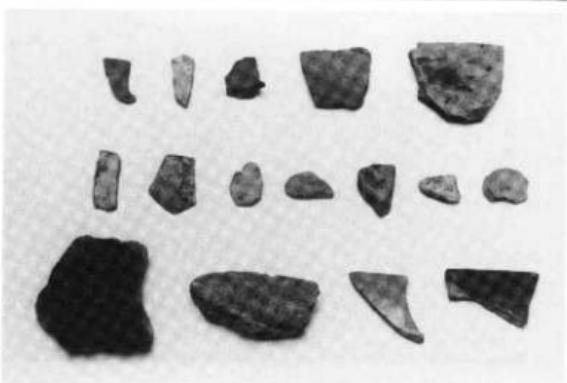
和西 II 遺跡



和西 II 遺跡表探遺物



小野遺跡



小野遺跡表探遺物



押屋古墳群

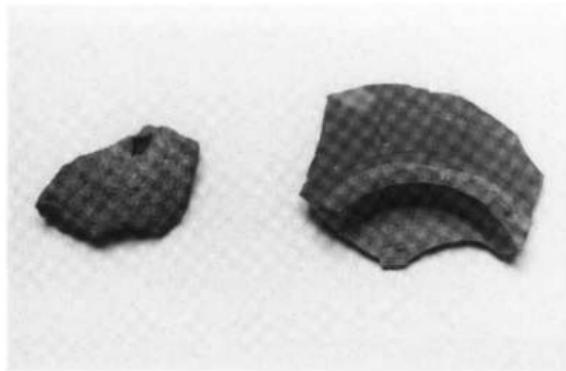
図版12



後谷丘陵古墳群



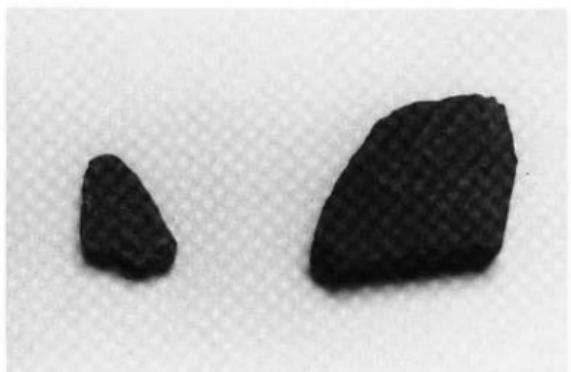
中出西II遺跡



中出西II遺跡表探遺物



海の平遺跡



海の平遺跡表探遺物



上阿宮 I 遺跡